横島に伝わる地名と由来

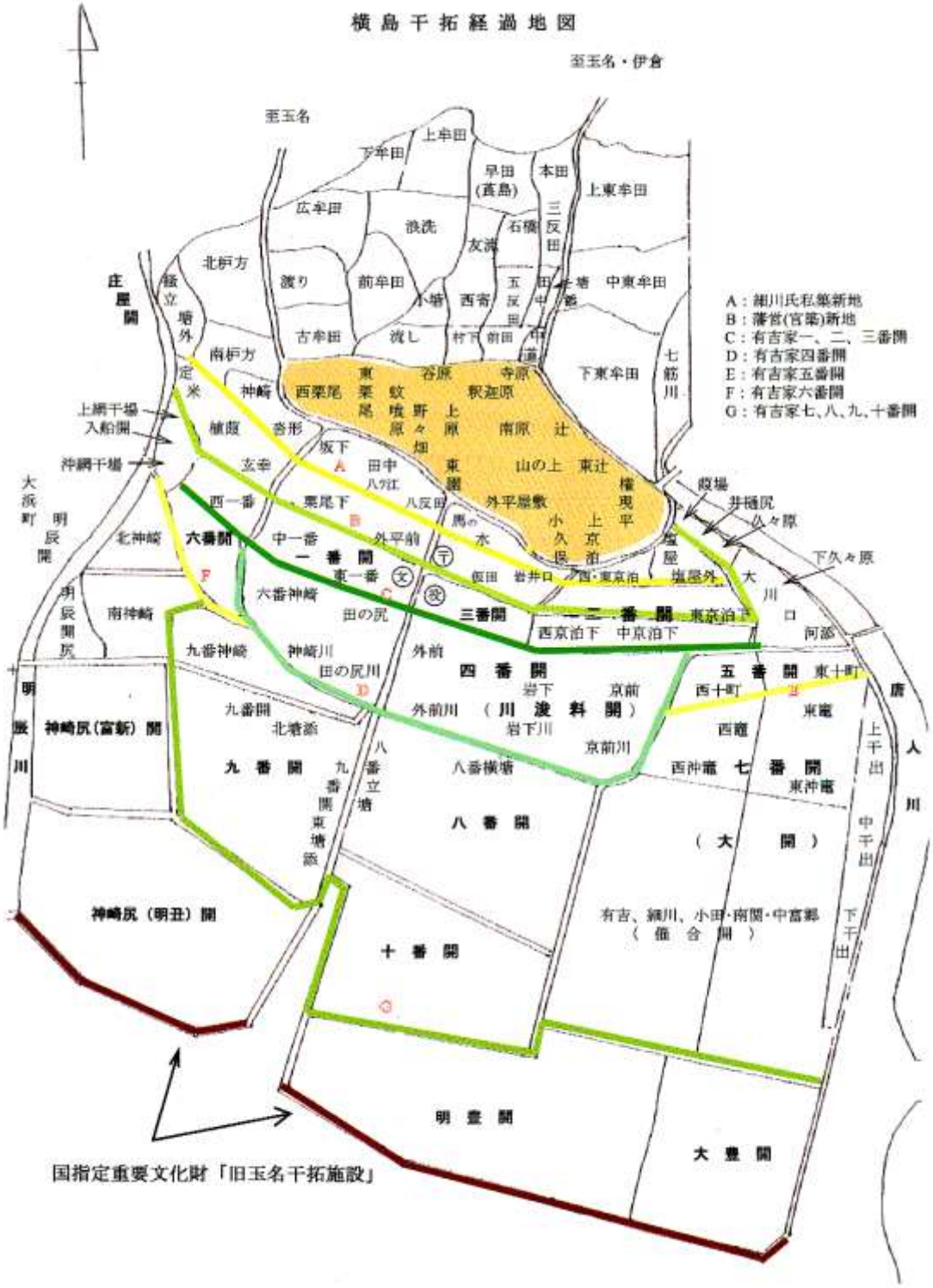
【 沼 垣 功　著 】

「石塘樋門」　【 横島町大園　大柿りえ子氏　作 】

横島校区まちづくり委員会改編

鹿子木量平(1753～1841)著　「勝国治水遺」　付図

「横島町史」自然・地理編　「ムタ」地名の分布より　(編者彩色)



国指定重要文化財「旧玉名干拓施設」

は　し　が　き

平成 17 年 10 月 3 日に玉名市、岱明町、横島町、天水町の 1 市 3 町が合併して人口 7 万人の新しい玉名市が誕生しました。

それに伴い、旧玉名市で行われていた地域づくり運動「一区一輝運動」を継続・発展させるという趣旨で、新しく「玉名 21 の星事業」が始まりました。

小学校区を単位として各校区に「まちづくり委員会」を組織し、校区の特色を生かした地域づくりを行っていくことになりました。

平成 18 年度、横島にも「横島校区まちづくり委員会」が組織され、「史跡ウォーキング部会」、「よこしま物語部会」、「ホタル環境部会」の 3 つの部会で活動を始めました。

「史跡ウォーキング部会」は、まず史跡整備を行いました。町内にある史跡に説明看板を立て、史跡を巡るウォーキングコースを設定しました。

平成 20 年度からは、毎年テーマに沿って史跡ウォーキングを実施しています。

平成 20 年度　：　コースウォーキング
平成 21 年度　：　史跡バスツアー
平成 22 年度　：　堤防体感ウォーキング
平成 23 年度　：　横島歴史散歩

史跡巡りを計画・実施する過程で、ガイドブックの必要性が出てきました。

そこで、平成 22 年度から、「横島郷土志」、「横島郷土誌副読本」、「横島町史」、「横島に伝わる地名と由来」等を参考にして部会員間で学習会を始めました。

学習を進める中で、横島は加藤清正による石塘築堤後大きく発展してきたという事実を踏まえて、まず手始めに「横島に伝わる地名と由来」を子供が読める本にしようということになりました。

この本は、昭和 49 年に父沼垣功（ぬまがきつとむ）が著したもので、郷土愛に根ざし、先人への感謝の念を込めて書かれたものです。その思いは巻末に原本の「はしがき」を載せていますのでご一読下さい。

原本は漢字が多く昔の文体で読みづらいので、ふりがなをつけたり文体を分かり易く書き直して小学校高学年でも読めるようにしました。

また、内容はできるだけ原本に忠実に沿ったものにしております。

横島だけでなく他の地域の方にもできるだけ多く読んでいただき、横島に対する理解を深めてもらいたいと思います。

なお、文中の「現在」や「〇〇年前」等の表記は昭和49年執筆当時とご理解下さい。また、地名に「開（ひらき）」をつけず通称表記になっている部分もあります。

平成２４年３月２０日

横島校区まちづくり委員会史跡ウォーキング部会長　沼　垣　堅　基

目　次

はしがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

1　孤島横島・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

2　戦国時代以後の横島・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

3　加藤清正の第一次工事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

4　加藤清正の第二次工事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

5　細川家の私築新地・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

6　細川公の藩築新地・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

7　恩賞による築造新地・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

8　有吉家の築造新地と郷開新地・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

9　民間築造新地・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31

10　新地鎮護の神社・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

11　横島を襲つた潮害・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

12　原本「はしがき」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52

1　孤　島　横　島

加藤清正像

横島干拓が農林省によって築造され潮止式が行われた昭和42年(1967)5月31日は、加藤清正が石塘築堤を完了した慶長10年(1605)11月25日から数えて362年目に当たります。

このことから考えてみると海岸線は干拓によって100年間に1kmずつ海へ進出した事になり、今から100年後には今の横島干拓地の沖に再び新干拓地が出来てもいいことになります。

今から500年前(1467)を考えてみると、横島村付近は一体どうだったでしょうか(1400年代と云えば南北朝がようやく統一しましたが、間もなく戦国時代に突入した頃です)。実はこの頃の横島は有明海に浮かぶ孤島でした。（※しかし、その後発見された慶長9年の検地帳によると豊水地区から大園方面にかけて干陸地が広がって来ていたことがうかがえます。　編者加筆）

熊本城

標高56m、周囲約4kmの全島には老木や雑草が生い茂り高瀬湾の南前面に横たわって高瀬津、丹倍ノ津(伊倉海港)の防波堤の役を果たしていた美しい緑の島だったことでしょう。その島にある、昼も暗いうっそうとした森の中に荘厳なたたずまいの熊野権現は正中2年(1325)に横島の地頭城子大学が勧請したものだと云われ、その下は丹倍ケ淵と云って深い荒瀬戸でした。高瀬港や伊倉港に出入する船がこの瀬戸に差しかかった時、あるいは瀬戸を越えるために満潮時の潮流の止まるのを島影で待っている時、「新九郎」と云う海賊の一味がこれ等の船を襲ったそうですが、その根城は「新九郎坂」付近だったと思われます。

伊倉を丹倍ノ津港と云って帆柱が立ち並び多くの船が往来していた頃、伊倉の唐人町には船繋ぎの銀杏が天に向って伸びていて出入りする船の目印になっていたと云うことです。また御幣振坂の北側には三抱えもある松の老木があつて、高い岸に打ち寄せる波の上に枝を伸ばし風にうなりを立てていたことでしょう。

この伊倉台地から高瀬湾を一望すれば、南に大きく横たわる「横島」そして内側の湾内には「小島」「千田川原」「小野尻」「川島」「萇島」等が浮かび、又海面にチョッピリ頭だけ出してわずかに樹木と雑草を生やしている名も無い小さな島が散在して、西方には「大浜」「小浜」「一本榎ノ洲」等が見え、これ等の島々の間には満潮には沈み、干潮には現れる大小の砂洲が沢山あったことでしょう。上東牟田開には今も「浅山」「大柴」

等の地名が残っています。

菊池川は下流を高瀬川と云って元は高瀬町の東から伊倉港の下を過ぎて久島山と横島の間を流れていたのです。もちろんその支流は現在の菊池川の流れの様に大浜町と滑石の晒との間をタヲ（川道）が流れていたと考えられます。

この頃は高瀬湾の沖に浮かんだ緑の孤島横島は海賊新九郎伝説の時代に当たります。

石塘から外平山に登る坂を今も「新九郎坂」と呼んでいますが、昔は道幅も狭く坂道の両側には樹木雑草の密生した険しい道でした。

坂の登り口から頂上までは300m以上ありますが、頂上付近には外海と内海の海上を偵察するための見張所や、洞窟へ通じる抜穴か隠穴が山の南北両斜面に作ってあったに違いありません。また、洞窟は山を南へ越えた外平方面にあったと思われます。

そして、洞窟の入口は外平海岸の白砂と松の緑で美しい浜辺であったに違いありません。そこには清水の湧く井戸もあり、豪壮な屋敷もあって、付近には漁師の集落が続き、一見平和な島の漁村のようでした。しかし、「外平屋敷」の上の山に「油煎り」と云って、油を煎るように新九郎が人間を逆さに吊し、下から火を燃やしたと云う伝説もある海賊の根拠地でした（いつか抜穴や洞窟が発見されるかも知れません）。

熊野権現の反対側の有明海に面して大永元年(1521)に一禅僧によって川尻大慈禅寺の末寺として「桟方院住吉山見正寺」が建立されましたが、その鐘楼の釣鐘は音色美しく風に乗って七里(約28km)の海を渡り島原の山まで聞こえていたと伝えられています。

戦国時代末期には諸国の大名はことごとく没落して、九州では薩摩（鹿児島）の島津と豊後（大分）の大友と新しく起こった肥前（佐賀）の竜造寺、有馬等が覇を競っていました。その頃、即ち天正5年(1577)肥後(熊本)は大友氏が占拠していましたが、竜造寺隆信は筑前、筑後（福岡）まで進出する勢いでしたので大友宗麟はこれに対抗しました。この時、肥後の武将はほとんど大友軍に参加しましたが、山鹿の隈部氏だけは竜造寺と手を結びました。竜造寺は早速肥後に五万の大軍を送りました。

一方、薩摩の島津が日向（宮崎）に進出してきたので、大友はこれと戦いました。しかし、大敗したため肥後北部における勢力はことごとく竜造寺の支配下になってしまいました。

肥後南部を支配した島津軍もまた肥後を北上し、菊水の日平を落として菊池川をはさんで竜造寺軍と向かい合ったのが天正8年(1580)11月です。

横島城址

天正11年(1583)11月、両軍の兵力は島津軍２万、竜造寺軍３万７千であつたと云われています。

島津軍は菊水の花蔟、伊倉を中心に兵を配備して菊池川に面していました。

一方、竜造寺軍は山鹿、南関、高瀬、横島に兵を配備していました。

横島は海中の孤島でしたが、戦をする上で海陸の大事な場所である関係上、竜造寺軍はその天然の要害を利用して城を構え、兵を増やして対岸の島津軍に備えました。

横島は当時、加藤島之助が城主でしたが、竜造寺軍からも数名の武将が派遣されていました。島津軍もまた横島を手中に収めるため水軍が三角の瀬戸から横島に迫り、陸兵は天水の竹崎や久島山等の突端から菊池川（現唐人川）を渡り横島に攻め入りました。

この時、横島はいたる所が肥前と薩摩両軍の戦場となったのです。

竜造寺軍は防戦しましたが追い返すことができず横島を捨てて敗退しました。

しかし、海上軍が滑石沖の海戦で大勝したので、一度敗退した竜造寺軍は勢力を挽回して高瀬方面からの援軍と共に再び大浜、横島を取り戻しました。

しかし総大将竜造寺隆信は島原の戦闘において有馬・島津の連合軍のために戦死し、軍兵多数を失い敗戦したため横島の竜造寺軍も肥前に引き上げました。この時の戦で横島の見正寺は焼失し、釣鐘は竜造寺軍に持ち去られたと伝えられています。

時に天正 12 年（1584）春のことです。

岳城（島原城）争奪布陣図

約 100 年間にわたる戦国時代はようやく終わり、天正 15 年(1587)6 月 2 日佐々成政が肥後の国主となりましたが、その翌年の天正 16 年(1588)5 月 14 日豊臣秀吉は失政を理由に佐々成政に切腹を命じました。その翌日、秀吉は肥後を加藤清正と小西行長に分け与えました。清正、行長は6月13日大阪を出発、海路を経て 23 日、豊後（大分）鶴崎に上陸した後、清正は 6 月 27 日に隈本城、行長は 28 日宇土城に入りました。清正はこの時 27 才でした。

2　戦国時代以後の横島

横島はまだ海中の孤島であった頃から人が住み集落をつくり生活を営んでいました。それを人呼んで横島と云いそれが地名となりました。後醍醐天皇の正中2年(1325)熊野権現が横島に勧請された頃は住民もかなり増加して集落を構成する様になっていました。

熊野坐神社

大永元年(1521)熊野権現のある山の反対側に

禅宗桟方院住吉山見正寺が建立された頃は島民の数も相当に増加し、神社の他に寺院も必要となったものと考えられます。横島島民もこの頃は自然に集落をつくりその集落には小さい神祠（ほこら）、仏堂、地蔵堂などを奉祀建立して信仰しました。

戦国時代末期の天正12年(1584)3月肥前の竜造寺軍と薩摩の島津軍が横島を戦場として戦いました。この時横島を占拠して島津軍の攻撃に備えた竜造寺軍は島内のすべての墓を押し倒して決戦に備えたと云ういわゆる墓倒しの伝説もあります。この肥前薩摩両軍の決戦の後は墓碑も住民も横島から姿を消してしまいました。ようやく平和が甦えった横島にはまたボツボツ住民が移住して来るようになりました。元から住んでいた人、まったく新しい移住者、横島の島民は肥薩戦のあと全く新しい生活に入ったのです。

その後、加藤清正が肥後に入国して石塘の瀬戸を築堤した慶長10年(1605)以後は横島に移住する人が急速に増加しました。

横島の集落は、京泊村・外平村・塘口村・粟ノ尾村の四部落でした。その中でも島幅の広い京泊方面に家屋が密集し道路も四つの通りが発達していました。

島の頂上を縦断する道路は京泊東の端から西方は栗ノ尾の端まで貫通しており、島の主要道路でした。各部落へ通じる道路はすべてこの縦貫道から分かれていました。

石塘・京泊方面には二ケ所の交叉点があり、西方の交叉点を「辻」と云い、東方の交叉点を「東辻」と呼んでいました。経塚はこの「東辻」の近くにあります。

慶長10年(1605)11月25日加藤清正が石塘築堤に人柱を立てて潮止工事を決行しようとした時、横島の頂上に多数の僧侶が読経して人柱の冥福を祈りました。そしてその経本をこの地に埋めた所から以後ここを「経塚」と呼ぶようになりました。そして経塚のある部落を「経留」と呼ぶようになり、「経留」を後に「京泊」と書く様になりました。

また、築堤工事の時大小無数の石を海中に投入して築造した所から「石塘」と呼ぶ様になりました。熊野権現の背後西方向の原っぱを「権現平」と云いますが、ここは昔耕作畑だった所です。その反対側の南面一帯を「上京泊」と云って集落の中心でした。

石塘樋門

「上京泊」には「寺屋敷」と呼ばれる所がありますが、これは「見正寺屋敷」の事で現在の京泊墓地の下であり、地蔵堂の所から東にかなり広い面積があります。

そして「寺屋敷」の北西部には非常に深い井戸がありました。「寺屋敷」の所から下に大きな坂があります。この坂は「井戸坂」と云って「上京泊」の一般住民が水汲みのために上り下りした坂です。その井戸は「西んごの井戸」と云って井戸坂を岸辺に降りて100m程西の岸辺にありました。その井戸は探せば今もどこかにあると思います。

「寺屋敷」の西方向には土地の有力者の屋敷が七屋敷もあってそれぞれ「藤の丸」「松の丸」「次郎丸」「吉丸」「西の丸」等と呼んでいました。

「東辻」（経塚）の西方向の原っぱを「山の上」と呼びまたの名を「頂上原」・「とんぐち原」等と云い、当時耕作畑だった所です。

これらの高所から流れる水を集めて雲仙岳方向に島を斜めに流れる谷があります。

周囲には老樹雑木が生い繁って年中水を蓄えて流しています。これを小久保谷（オクボンタン）と云ってこの付近には狐などが多く住み、小久保谷の目ただれ狐など横島住民と非常に馴染みの深い狐もいました。

小久保谷の下方は島が南に突出していて絶壁となっています。この島の突出部から東へ100m程の絶壁を「京泊高岸」と云います。一面に海だった頃は大波がこの高岸に当っては砕けていたことでしょう。

その他、「上京泊」の地域内には馬洗場の跡等も今は畑となっていますが、時々昔のことが古老の話に上ります。昔、金さんと云う老人があって、「上京泊」の南端で「西んご井戸」の崖上付近に1a程の平らな所を自分の日常生活の場所としていた所から京泊の人達はここを「金さん場」と呼んでいます。

小久保谷のすぐ西側の小高い平坦な所を今も「殿の屋敷」と呼んでいますが、その殿が誰であったかは分かりません。

「新九郎坂」は石塘から横島山を斜めに登る坂で海賊新九郎の伝説のある坂です。

「新九郎坂」の北西で、法雲寺の上の方を「寺原」と云いその南側を「南原」その西を「上原」と云います。共に耕作畑だった所でその下方に海賊新九郎に関係のある「油煎り」と云う所があります。

「油煎り」の下方一帯、外平の岸元までを「外平屋敷」と云います。昔から外平の住民が住居を構えていた場所で今の墓地の下までです。

「外平屋敷」の北の端付近に昔は阿弥陀堂を祀ってありましたが、その前の方に外平住民の使用していた井戸がありその深さは30m位ありました。

「外平屋敷」の西端を登る坂を「大坂」と云って大園のお釈迦坂に通じています。

一方この「大坂」を途中から右に折れて石塘の方へ斜に登れば「油煎り」を通って「新九郎坂」に通じています。

「大坂」に対して「小坂」と云うのがあります。これは大園から「谷坂」を越えて外平に下る直前に右に下る小さい坂を「小坂」と云い、その「小坂」を下った所の井戸を「小坂井戸」と呼んでいます。「小坂」の上は「東園」と云いますが、ここは外平の住民が梅・桃・栗等の果樹を栽培していたのでしょう。

「外平」と云うのは、島の外側の平坦な土地と云う意味です。

「東園」の北西方向には「野々畑」・「蚊喰原」・「谷原」と続きますが、全部耕作畑です。これ等の耕作畑を左右に見て頂上を越えれば谷に出ます。この谷は島の南方向の「小久

保谷」に対して島北は「谷原の谷」と云います。

現在、山越えの道路となっている所は、昔は小さい渓谷でその両側の適地に住居を構え集落を形成していた所からその地名を「谷」と呼ぶようになりました。また別名「本村」とも云います。

昔の山越え道は今の飛行場からの水路の付近から外平の方へ通っていました。

大園は今の「大園牟田」の新地が出来てから、広い田園と云う意味で生れた地名です。

それ以前は友口村（塘口（トングチ）村）と呼んでいました。

「お釈迦坂」の付近を「釈迦原」と云いますが、「お釈迦坂」の登り口に昔釈迦堂があった所からそれが坂の名になり、また「釈迦原」と云う耕作畑の名になったものです。ちなみにその釈迦堂は現在「寺原」の観音堂に合祀してあります。

小川氏宅の老杉

大園の塘口には小川作太氏（元村長）宅の道路側に老杉があって、その根元に美しい清水の湧き出る井戸がありますが、これは加藤清正が陣屋で飲料水に使用していた所から今もなお清正公のお茶の水と呼んでいます。

この井戸から僅かに東方向に顕正山法雲寺と云う浄土真宗の寺があります。

これは先に述べた加藤島之助の子、又次郎（正一）が明暦3年(1657)僧侶となって正西と名乗りここに僧庵を開き、久しく伊倉光専寺の末寺として存在していました。その後享保12年(1727)に本願寺より法雲寺の寺号を賜ったと云います。

法雲寺

この寺の１３世に加藤恵証と云う住職がおられ演説高僧として有名でした。世界宗教大会に日本仏教代表として出席しておられます。

またこの法雲寺の所在地は加藤清正が石塘築堤工事を行った時の陣屋跡と伝えられています。

横島に古くから存在した神社仏閣は先に述べた熊野宮・見正寺の他に栗ノ尾下方の地蔵堂、大園谷の地蔵堂、大園観音堂、外平東園の観音堂、外平屋敷の阿弥陀堂や見正寺焼失後その跡に建立した地蔵堂等があります。

「屋敷」と名のつく地名は横島に五ケ所あります。即ち「上京泊」の「寺屋敷」同じく上京泊の「七屋敷」小久保谷横の「殿の屋敷」島南の「外平屋敷」そしてもう１つはこの島北側の「屋敷」です。これは天正年間(1500年代後半)加藤島之助の一族がここ

に居を構えていたので「屋敷」と云ったのでしょう。ちなみに「寺屋敷」は寺、「七屋敷」は豪農、「殿の屋敷」は殿で、「外平屋敷」は伝説によると昔平家の落人が阿弥陀堂跡のすぐ上「油煎り」の下の方に住んでいたと云います。

更には海賊新九郎の邸宅は外平にあったと云う説があります。こうした関係からも「屋敷」と云うのは大衆の住宅地と云う意味ではなく有力者の邸宅を意味するものと考えられます。

栗ノ尾は横島を「鯨島」の異名から考えると京泊方面が頭部で、栗ノ尾方面は尻尾の方になります。その尾の方面一帯に栗林が繁茂していたことでしょう。従って「栗原」の姓も存在し、鯨島の尾の方を「栗ノ尾」と呼ぶ様になったと思われます。その栗ノ尾を東西に分けて「東栗尾」・「西栗尾」と云います。東栗尾方面の島の北側には「上方」「下方」と云う２つの部落があって、栗ノ尾方面集落の密集地となっており、「下方」から「上方」へ通じる坂の両側は住居が密集し賑いを呈していました。

一体に横島は北側が緩やかな斜面で南側は絶壁になっています。島南の外平と栗ノ尾の境に高い絶壁が 100m程続いていますが、これを「外平高岸」と呼んでいます。有明海が横島の島岸を洗っていた頃はこの「外平高岸」は「京泊高岸」と共に横島の難所であったと思われます。

「西栗ノ尾」の尾根づたいに縦貫している道路の両側にも住宅が密集してまことに景観を呈していた事でしょう。「横島山栗ノ尾」の突端には神崎明神（島崎明神）が祀られ、そこから西北を眺めれば眼下に安甲川の小流が望まれ、僅かに遠く菊池川の清流が悠揚として流れ、洋上遙かに西方を眺めれば雲仙の雄姿はいやが上にも美しく「島崎」はまさに天下の絶景でした。

島崎神社

島崎は安甲川の上空になります。即ち安甲の上、それは発音する場合は「甲の上」となります。

従って島崎一帯を「甲の上」とも云います。

３　加藤清正の第一次工事

（小田牟田新地築造）

かって、有明海に浮かぶ一孤島として存在した横島に一大変革をもたらしたのが加藤清正でした。

加藤清正は肥後に入国した翌年の天正 17 年(1589)から天正 19 年(1591)までの３年間で菊池川の流れを変えて支流のタヲ（川道）を本流としたのでした。

その目的は広大な小田牟田の新地を造成するためでした。

西　塘　（廻塘：現在、大浜方面への道路として利用、一部は基盤整備等で変更　編者加筆）

菊池川は従来高瀬町の東から伊倉港の下を過ぎて横島と久島山の間に流れていましたが、桃田から千田川原、小島を経て大浜に至るまでの川塘を築造しました。大浜から横島栗ノ尾までは潮受け堤防を築きました。この塘を西塘と云い別名廻塘とも云います。

こうして菊池川の本流が迂回して流れるようになったので千田川原から南方一帯は遠浅が一層顕著になりました。

東　塘　（現在、豊水方面への道路として利用、一部は基盤整備等で変更　編者加筆）

しかし丹倍ケ淵の荒瀬戸は依然として潮流の出入が激しく折角遠浅になった地域を海水で潮浸しにしてしまうので、大園観音堂下から北牟田、川島を経て千田川原まで約６㎞の間に堤防を築いて唐人川の潮受けとしました。これを東塘と云います。

加藤清正の第一次工事として実施した菊池川掘替工事と、西塘と東塘の築造によってその中に出来た新地は豊水村、大浜町、大園村、横島村を合わせて 600ｈａ以上に達しました。潮流が入らないようになったこの新地を自然の形状を利用して鍬先で少しずつ開墾しては小開を完成して行きました。従ってその形状はまちまちでした。その小開がそのまま「小字」になり今も残つている地名になっています。

しかし明治 22 年(1889)大園村と横島村は合併して横島村となりました。昭和 18 年(1943)には戦争完遂のためこの新地全域が陸軍飛行場となりました。

更に昭和 45 年(1970)には圃場整備が実施されたために飛行場の姿はその片鱗も見る事は出来なくなりました。

「ローマは一朝にして成らず」と言いますが、菊池川流域に大きく広がる肥沃な土地も決して短期間に発展したのではありません。事業の近代化も飛躍的改善も先人の偉業と努力のおかげで初めて成されたものですから、我々は祖先に感謝しその精神を継承し、そして子孫に語り伝えなければならないと思います。

干拓によって始まり干拓によって今日を築いた郷土横島は加藤清正時代から今日まで 100 個に及ぶ小字が存在し、更に外平山の小字を加えれば優に 120 個を越えています。

今は既にその形さえも無い小字もありますが、370 年前から数年前まで存在したこれ

等の小字を判明する限り語り伝えたいと思います。

早　田（　莨　島　）

大園に属する一番北端の小開で「ワサダ」と呼びます。ここは横島一帯が海であった頃から「莨島」と云う小島のあった所で耕地面が割合高く殆んど畑地でしたが低地面を利用して早くから開田したので「早田」と云うのでしょう。面積は 2ha 弱の狭い開です。海の小島であつた頃からタバコを栽培していたらしく「莨島」の名があるところから小字も別名を「莨島」と呼んで、古い時代からヤンボシ塚（山伏塚：修験者の生活の跡　編者加筆）と云う小さい古墳があり、早くから人の生活が営まれた所です。民家も古くから 3 戸程居住していましたが飛行場建設の時大園部落の方へ移住しました。

石　橋

東塘から「早田（莨島）」方面へ渡るため古い時代から石橋が架けられていたところからこの名があります。面積は 3ha 弱で「早田」と同様に耕地が高いので後々まで畑地でした。水田にした後も水を引き込めないので揚水灌漑をして稲を育てました。

本　田

大園と北牟田のほぼ中間の東塘に添って「早田」に接した 6.5ha 程の開で、塘に添って小さい林がありその中に 3 個の建造物がありました。

① 「文成（政？）九戌十一月」と刻した石の祠
② 稲荷大明神の社屋約 1 坪の木造
③ 人柱に関する記念碑

見渡す限りの広牟田の中に社森があって神秘的な物語を秘めている様な所で、「本田さん」と云って親しまれていました。

昔は海面から体を出して樹木と雑草の繁った名もない細島でしたが、石塘築堤後(1605)は人柱の霊を安置した神域として、後世までその遺徳が伝えられています。

この田の神を中心に開田した所を「本田開」と云います。本田大明神を除いて大園はないと云われる程由緒深い所でしたが、昭和 45 年(1970)圃場整備の時現在の所(東塘の塘口)に移転しました。

塘　添

東塘の西側に添って開田された所で6.5ha。塘口から200m程北方を昔から「ホゲの端」と云いますが、これは丹倍ケ淵の瀬戸から押し寄せる潮流のため東塘が決潰したために地面がホゲた所です。文政年間(1828)大園村の百姓孫八が「ホゲの端」で蓮根を掘っていた時に雄亀の化石を掘り当てました。1年後、孫八の夢枕に雌亀が現れて哀願するのでその場所を堀ってみると果たして雌亀の化石が見つかりました。この雄と雌の亀の化石は川島の広瀬家に秘蔵してあるそうです。

三反田　・　五反田

共に田の枚数を呼んだ地名です。三反田開は田が3枚、五反田開は5枚の田があったためでしょうが、実際の面積は三反田は3ha強で、五反田は5ha強です。

友　竜（塘流）・　西　寄

「石橋」開を越えた所に約10ha余の極めて狭い地域を「塘流」と云いますが、塘の土手のそばを浅く広い川となっている地域を水田にした所です。「友竜」と書きますが「塘流」だろうと思われます。「早田」と「西寄」の間の低地です。「西寄」は大園地区の中で最も西に位置する開なので字義の通り「西寄開」と云い4.5ha弱の面積があります。

村　下・前　田

大園本村(谷部落)の下方一帯を「村下」と呼びその面積は80aです。大園の地番の読み始めの地点で、大園1番地は「村下」の西南の隅で本山石油店のある所です。

谷と東の間の前面に広がる地域を「前田」と称して面積は2.3haです。共に集落と開の関係で小字名を定めてあります。

中　道・田　中

谷部落と東部落の境に主要農道が北の方向に走っていますが、通称これを「中道」と呼ぶところから、この農道と「東塘添」開の間を「中道」開と云います。面積は約1haあります。

「中道開」の北隣り大園牟田の中に入った所を「田中開」と云います。面積は4.4haです。

上　牟　田・　下　牟　田

栗ノ尾に属する地域で大園との境の最も北方の開を「上牟田」と呼び、横島地番はここから始まります。横島村１番地はこの開内にあります。面積は 7.3ha です。
「上牟田」の下手西隣が「下牟田」開で 4.5ha あります。

広　牟　田

横島山北面の小開の中で最も広く面積も 11ha に及ぶ所からこの名で呼ばれるようになりました。大浜との境で西塘に接し 2 個の井樋(いび)を設置してあり、用排水する上で大切な場所でした。

浪(なみ)　洗(あらい)

全体が海であった頃から海が深く後々まで海水をたたえ、渚(なぎさ)を洗っていた所で耕地となってからも低地で水はけの悪いところでした。この開から「池端通(いけはたとおり)」と呼ぶ排水路が整備されて西塘添の「広牟田」の井樋(いび)に通じていました。面積は 9.5ha です。

前　牟　田

栗ノ尾北側集落の前面に広がる 4.5ha の農地である所から「前牟田」と云います。「浪洗開」の西側に隣接(りんせつ)して比較的に低地で昔のタヲ（川道）と思われる水路があり通称「池端通(いけはたとおり)」と云っていました。

渡　り

前牟田の西隣に続いて西塘に接した開で５ｈａあります。「浪洗」から前牟田を経て「渡り開」にかけて「池端通」と云う広い排水路が流れて「広牟田」の井樋(いび)に通じていました。更に大浜の「馬場中」方面から「中エゴ通り」と云う水路が流れて来て２本の水路が通っていました。これは共に昔のタヲ（川道）ですがここに架(か)けられた２本の橋を渡って行く開である所から渡りと呼ぶ様になったのでしょう。

小(こ)　塘(ども)

「浪洗い」と「前牟田」の隣接(りんせつ)する南側にほぼ三角形の、比較的に地盤が高い 1.6ha の土地が「小塘」開ですが、これは「浪洗い」等より早く開田した所で周囲に小さい塘を築いてタヲ（川道）の水の浸入を防いでいた所からこの名があるのでしょう。

流　し

栗ノ尾下方部落から大園谷部落の「村下開」に接する細長い地域 1.7ha を「流し」と呼びますが、この付近は潮流の激しかった所からその名が残っているのでしょう。

古　牟　田

栗ノ尾島崎神社の所を軸にして東は山に添って「前牟田」に接するまで、北は西塘に添って「渡り」に接するまでの地域 3.5ha を「古牟田開」と呼びますが、これは栗ノ尾北側の島裾の遠浅で古くから付近住民の手によって耕作の鍬が下されていた所です。
以上が清正の第一次工事として完成した新地で大園村と横島村に属する小開の全部ですが、昔は「流し」「古牟田」だけが横島村に属して他はすべて大園村に属していました。

4　加藤清正の第二次工事

（石塘築堤）

それから加藤清正は文禄元年（1592）1 月対島に出陣しました。朝鮮から帰国したのが慶長3 年（1598）11 月 23 日ですが、慶長 5 年（1600）関ヶ原の戦が起こり清正は直ちに宇土城を攻め、八代城を収め、柳川城に向かっています。
　ようやく天下が鎮まったのは慶長7年（1602）で、その間10年経過しています。従って加藤清正が第二次工事として石塘築堤に着手したのは慶長 8 年（1603）と考えられますが人柱や神仏の加護によってその築堤工事に成功したのは慶長 10 年（1605）11 月 25 日でした。この石塘築堤完了によって小田牟田新地は完全に川水と潮流の攻めを防ぎ陸地化することができました。これによって生まれた新地は四つの小開です。

上東牟田・中東牟田・下東牟田

従来は東塘と船津往還（久島山から伊倉船津を過ぎて千田川原に通ずる堤防道路）の間は潮流が自由に出入して時には堤や塘の決潰等もあっていましたが、石塘築堤工事の完成によって新地が生まれました。大園本方に対して東塘の外側の新地であるところから「東牟田」と呼び、その地勢によって「上東牟田」8ha、「中東牟田」5.7ha、「下東牟田」6.5ha に区分しました。「上東牟田」は七筋川と共に大園村に属し、「中東牟田」と「下東牟田」は横島村に属していました。

七　筋　川

東塘と船津往還の間は太古から船の行き来の多い所で、特に唐船が出入していた所から今も「唐人川」の名が残っています。石塘築堤後は桃田から伊倉方面への旧川床による本流が流れて、尾田川方面の水と合流し「東牟田」付近では3本に分かれ、「北牟田」方面からの排水路が1本、大園方面からの排水路が2本、それに小天方面へ導入する用水路が1本、合わせて7本の川筋があった所から七筋川と呼びます。現在は4本の川筋になつています。面積は3haで大園村に属していました。

七筋川近辺　（　旧・現　）

5　細川家の私築新地（　内家開　）

その後寛永9年(1632)6月肥後国主加藤忠広は幕府から国替えを命じられ、僅かに1万石を与えられて出羽庄内の酒井忠勝にお預けの身となりました。一方肥後国５４万石の領主には豊前小倉の藩主細川忠利が転封されこの年の12月9日に熊本城に入りました。

細川家は入国の翌年の寛永10年(1633)から私費で横島新地の築造を開始しました。細川家新地築造の第一次計画であるいわゆる細川家の内家開です。

島の南側は当時、既に浅い海になっており、高い堤防を必要としないで切立新地と云つて鍬の先で築造していったものです。細川家が築造した私築新地は寛永14年(1637)までの約5年間で10ケ所の開を完成しています。

沓　形

栗ノ尾島崎神社の反対側で新地の形が神主の履く沓の形によく似ている所からこの地名があります。面積は6.5haです。

神主の履く沓

坂　下

横島の栗ノ尾方面の南側は絶壁で北側がなだらかな傾斜地であるので住民は多く北側

に住んでいて上方、下方等が主な集落でした。
島の南側が開発されるに従い道路の必要に迫られ山から下る坂を掘削しました。
その坂の下を開墾した所が坂下開でその面積は 3.4ha です。坂を掘削した土砂のためでしょうか約三分の一は今も高台の畑地です。

田　中

「坂下開」の南側に築造した 4.3ha の小開を「田中」と云います。これは今まで築いた新地が全て岸の根元であり畑地であるのに、初めて岸を離れた所に築かれ「御内家開」として築かれた「沓形」、「坂下」、「八ツ江」、「八反田」の真ん中に田を作った所からこの名があります。

八　ツ　江

田中の南に東西に細長い高洲があってその周囲には沢山の小さい入江や湾曲があった所からこの名があります。この高洲の線を南の潮受堤として開いた所で面積は 3.7ha です。

八　反　田

田中の東に隣接し外平の学校通りまでの地域で地形の関係で八枚の田畑に区画してあった所から八反田の名があるのでしょう。
以前の面積は 3.9ha 程ありましたが昭和 18 年(1943)小田牟田新地の真ん中に横島・大浜・豊水の三ケ町村にわたって飛行場が建設された時外平山に暗渠を掘削して排水路を飛行場から九番開樋門まで一直線に開通したために二分されました。
この飛行場排水路は昭和 36 年(1961)11 月 27 日これに架設する外平橋改修の時、村長小川作太氏の命名で「甲申川」と名付けました。
昔は「東園」「八反田」「外平前」の三つの小字は大園村に属していました。

馬　ノ　水・同　免

外平学校通りから「小久保の谷」下に至る間のほぼ三角形の開で中程に広い水溜場があって、「小久保の谷」の岩井戸から湧き出る清水の一部はここに流れ込んでいました。
昔から殿様と呼ばれる郷士が居てその愛馬の飲料水や水浴に使用していた所から「馬ノ水」と云います。今も「殿の屋敷」と呼ばれる所が「外平屋敷」と「小久保」の境付

近にありますがその殿が誰であるかはわかりません。

この開は最初畑でしたが後に南半分を水田にしました。また畑の部分を別名「同免」と呼んでいますがこれは畑の所も田の所と同率の年貢高と云う意味です。

西京泊（山根）・東京泊（船津）（美奈須）

加藤清正石塘築堤工事の時、人柱を立て横島（外平山）の頂上から多数の僧侶が読経する中に激流逆巻く丹倍ケ淵の荒瀬戸を締切ったと伝えられています。

経文はその地に埋めこれを経塚と呼び経塚のある村を「経留」と云いますが、今は「京泊」と書きます。その「京泊」の岸辺に築いた新地を東西に分けて「西京泊」が 3.3ha で、「東京泊」が 4ha です。

後世になって「西京泊」の山寄りの部落を「山根（ヤマンネ）」と呼ぶ様になりました。

「東京泊」の東南隅一帯を「美奈須」と呼んでいますが、これは陸地化する以前まだこの付近が海底であった頃ビナ（渦巻形をした小さい貝の一種）の沢山生息する所だったので今に美奈須の名が残っています。

また「東京泊」の東北隅は昔船着場だったので「船津」と呼んでいます。また西北隅を「稲田区」と云うのは京泊全域の区割をした時、稲田丈次郎と云う人が区長となったためそのまま地名となったものです。

神　崎

横島山「西栗尾」の突端の崖下で「沓形」開の西隣に位置しその面積は 1.7ha です。

島崎神社、通称、神崎明神が横島山西突端の崖上に祠ってある真下の新地であるためこの名があります

玄　幸　（玄黄）

「沓形」の南に築いた新地で 1ha です。細川家が横島に私費で築造した「内家開」は 10 ケ所で、その面積は約 35ha です。

細川家におけるこの「内家開」の築造は横島における新地発生の第一歩でありその根源をなすものです。細川家が肥後の藩主となって年数は短いですが肥後の天（玄）地（黄）は定まりました。そう云う意味で「玄黄」と名付けたのでしょう。「玄幸」と書きますが「玄黄」が正しいと思われます。

6　細川公の藩築新地

（官築開）

細川家は新地築造の第二次計画として藩庁の直轄経常により築造費の総てを藩庁において負担する官築(藩築)開の築造を開始する事になりました。

それは「内家開」外側の 10 ヶ所の開です。その築造年代は私築の「内家開」の築造から約 100 年経過した頃からです。即ち延享年間(1700 年代中頃)から天明年間(1700 年代後半)頃までに築造されました。

塩　屋　（新屋敷）

延享2年（1745）頃唐人川方面に築造された新地で面積は 1.9ha です。小開ですがこれが「官築開」の鍬入れでした。この付近は横島東側の岸辺で以前には塩焚き等の製塩業を盛んにやっていた所からこの名があります。また隣の船津が早くから住宅地になっていたのに対して新しく住宅地になったため「新屋敷」とも云います。

南　櫨　方・北　櫨　方

栗ノ尾北方向の西塘添の遠浅になった菊池川流域の西塘と安甲川の間に出来た新地で、宝暦8年(1758)頃の築造で「南櫨方」5ha、「北櫨方」8.1ha です。

この頃は小田牟田新地内の排水を合流した水路が豊水方面から大浜の下手にかけて流出しておりこれを安甲川と称していました。さて「櫨方」と云うのはハゼやコウゾ（紙の原料木）や蚕糸等に関しては専任の役人がいて今の専売局の様な役目を行っていたのですが、非常に収益が多いので各地の新地築造に費用を出していた訳です。

従って「櫨方開」と云う名称は各地にあります。この「南北櫨方開」もその様にして出来たものです。肥後藩では細川重賢（越中守と称し霊感公と云う）の代にこうした産業の奨励を行い櫨を扱う役所は寛延2年(1749)に既に設けられていました。藩営の製ロウ所は宝暦13 年(1763)に造られました。この「北櫨方開」に「赤井樋」と云うのがありますがこれは「櫨方開」の排水扉門として設置されたもので、赤い色をした彫刻石で極めて精巧に造られています。扉門の大きさは内側寸法で高さ 65 ㎝、幅 60 ㎝です。宝暦8年(1758)の設置と考えられるので今から 216 年前になります。文化財としても「赤井樋」は大切に保管しなければならないと思います。

赤井樋

外　平　前

明和5年(1768) に「八反田」、「八ツ江」、両開の前面に築造した新地で7haあります。外平は島の外側にある平坦な所と云う意味であり古くから存在した景勝の砂浜であったと思われます。天正12年春(1584)竜造寺軍と島津軍が横島で戦った時、島内は至る所が戦場となりましたが、その主戦場は海浜の外平でした。その外平の前面の新地と云う意味から「外平前」と呼びます。昔はこの「外平前」は「八反田」、「東園」と共に大園村に属していました。

栗　ノ　尾　下

横島のことを別名「鯨島」と云います。

周囲約4km、東西の延長約1.8km、南北の幅は広い所で約500m、これが青海原の中に浮かんでいる姿を南の海上から見れば巨鯨が東に向って泳いでいる様な姿に見えるからでしょう。即ち京泊の方が頭部で栗ノ尾方面が尾部に当たる訳です。その横島の尾部一帯に栗林が繁茂していた所から「栗ノ尾」と云います。

その栗ノ尾の下の方の新地と云う意味で、「外平前」開の西隣、「八ツ江」、「田中」両開の前面に明和5年(1768)に築造した新地で3.9haです。

植　葭

明和5年(1768)に「神崎」小開の南前面、「玄黄開」の西隣に築造された新地で6.6haです。葦は水辺を好む宿根草で昔から湿地のぬかるみを改良するのに効果があると云われます。葭は葦のまだ成長してない頃の呼び名です。考えを巡らせてみるとこの新地は地形の関係で相当に湿地が深く稲の栽培に困難するので葦を繁茂させて水分を抜き宿根を伸長させて地盤を固めるために葭を植え込んだ所からこの名があると思われます。ちなみにこのやり方は現代も広く行われている方法です。

仮　田　(刈　田)

天明2年(1782)に築造された「馬ノ水開」の前面、「外平前」の東隣に畑として築造された5haの新地ですが、後には約8.8haの水田となりました。

一般には「仮田」と書き、時に「刈田」と記した場合があります。いずれにしても畑を田に変更した時に生まれた名であろうと思われますが、古老の説にも確信のもてるものはありません。もちろん文献も見当たりません。

当時は「仮反」と呼んで新地築造後 3 年ないし 5 年位は開主(築造主)と小作人が立会協議の上収穫高相当の徳米(小作米)を定める制度もありました。

外京泊・塩屋外

天明 2 年(1782)に築造した新地です。「内家開」として築造した「西京泊」、「東京泊」の外側に築造したので「外京泊」と呼びました。面積は 3.1ha です。

一般に「葭場」または「塘」とも云います。そのすぐ東隣に同時に築造した新地が先に築造した「塩屋開」の外側に当るので「塩屋外」と呼びその面積は 4.9ha です。

定米

天明 2 年 (1782)安甲川添いに築造した新地で「南櫨方開」の外側に当たる面積 2.6ha の小開です。従来、百姓の納める年貢高はその年の作物の出来具合によって高くも低くもなりました。しかし藩庁としてみれば毎年の税率が変わるのは不便です。それで数年の出来高を平均して一定の税率を定め年貢を取り立てるようにしました。

この制度を「定免(定米)」または「受免」と云いました。免とは税率のことです。

こうした「定免(定米)」または「受免」の制度は全国的には享保年間(1730 頃)から行われていましたが、肥後藩では宝暦年間(1700 年代中頃)重賢の代に試験的に行われた程度でした。いわゆる宝暦の改革です。横島における細川藩の官築新地は丁度この頃築造されたのでこの開を「定米開」と呼ぶのでしょう。

7 恩賞による築造新地

官築開とは別に殊勲の恩賞として、細川藩士陣佐左衛門(ｼﾞﾝ ｽｹｻﾞｴﾓﾝ?)に築造を許可した新地があります。

岩井口 (陣殿開)

京泊の西、岩下に「岩井口」と呼ばれる面積約 4.9ha の新地があります。昔、横島は雑木林の山で所々に松その他の大木が枝を伸ばして繁っていました。「小久保谷」(ｵｸﾎﾞﾝﾀﾝ)の両側も雑木林が繁ってかなり山深い所でした。そうした所だったため「小久保谷」はいつも清流が谷の登口にある大きな石の間から美しい清水が絶えず湧き出ていました。

その「小久保谷」のすぐ東手横には真黒いカネ岩が天井を突き出し、、岩根は広い平井戸になっていて、壁と天井からはいつも雫が落ちていました。「小久保谷」の下の方向一帯

を「岩」と呼んだり「岩井戸」と云ったりしました。その入口と云うので「岩井口」と云うのです。

この「岩井口」の新地を普通は「陣殿開」と呼んでいますが、これは寛永14年(1637)10月天草島原の乱に細川藩も三万の兵をもって出動しました。翌15年(1638)2月原城の総攻撃があって天草島原の乱はようやく平定しましたが、この時細川藩士の陣佐左衛門は敵の大将天草四郎時貞の首を取り功名第一の殊勲をたてました。

天草四郎像

その恩賞により横島海岸に新地築造の権利を得たものであると伝えられています。

さて従来は新地を築造しても利用する水利の便がなかなか得られなかったので、横島の干拓新地で水稲の耕作されたのは僅かに「大園牟田」の一部だけで、他はすべて畑地として開墾していたのでした。従って「小久保谷」、「谷原の谷」、その他に存在する小さい谷の水も大切に保存して使用していました。特に小久保谷から流れて来る水は「馬の水」の広くて深い水溜場に溜め置いて山の周囲の田畑に使用していました。

その水路は「馬の水」から外平道路（今の県道）を越えて「八反田」「田中」「沓形」を経て横島山の西の端を迂回して、山の北側に当たる栗尾島崎神社前の「古牟田開」方面まで引かれていました。そのために横島村には古い時代から山の周囲に３ケ所の橋がありました。

①馬の水橋：「馬の水」から「八反田」に行く外平道路（現県道）に架けた橋

②沓形橋：「沓形」から「古牟田」に行く栗尾島崎神社横の道路（現県道）に架けた橋

③網瀬洲橋：「網干場」方面に行く道路に架けた橋

この３つの橋が横島で最も古くから存在していた橋です。

なお、小田郷の用水については歴代の総庄屋が大変苦心を重ねて来ましたが、宝暦13年(1763)時の小田郷総庄屋小田次左衛門がその子茂助と共に、木葉川と菊地川の合流点に大樋門(寺田井樋のこと)を新設し菊池川の水を導入して木葉川の水と合流させ、伊倉、横島方面の灌漑用水の確保に成功しました。

(小田茂助は後に荒木茂助久真と云いその後も代々玉名地方に在住したが、現在は神奈川県川崎市に居住しておられるそうです。)

【※　小田一族の墓は玉名市玉名の広域農道と新玉名駅道路の交差点近くの山中にある

編者加筆　】

８　有吉家の築造新地と郷開新地

しばらくして細川家は「内家開」として 34ha、「官築開」として 54ha、合わせて 88ha の新地が横島の南方に完成したので、細川家も藩もその後の横島における新地築造はすべて家老の有吉家にその権利を独占させました。

有吉家は新地築造権を獲得して文化年間（1804 以降）から横島における新地築造を開始しました。以後藩政時代の末期に至るまでの約 60 年間にわたって横島地先における新地築造が続けられ、完成した新地は 11 ケ所です。その面積は 287ha に及び横島が今日の発展を遂げる基礎を築いたのです。有吉家は実際上横島新地の領主であったと云うことができます。有吉家の築造した新地の地名は一番開から十番開まで築造完成の順序に従いそのまま地名としました。従って開名（小字）には特別の意味はありません。

しかし各開にはそれぞれ特徴があり、永く呼び慣れた特別な地名や言い伝え等もかなりあるので、そういうことについても出来るだけ詳細に記しておきたいと思います。

一　番　開

横島小学校と横島中学校のある所から西方一帯で官築新地（外平前、栗尾下、植葭）の南前面に当たり、東西に細長く築かれ文化 4 年（1807）の竣工で、面積は 14.6ha です。

「一番開」の名前の通りこれは有吉家が横島における新地築造の最初の鍬入れ地です

「一番開」は東、中、西、に区分し、現在の横島小、中学校は東一番に建っています。

（　昭和 53 年有明中学校統合まで小中学校併設でした　編者加筆　）

二　番　開　（東京泊下、中京泊下、西京泊下）

「京泊下」の官築新地（塩屋外、外京泊）と「陣殿開」（岩井口）の前面で東西に細長く 16.3ha あり「一番開」竣工の翌年文化 5 年（1808）の築造です。

「東京泊下」を別名「新田」と云いますがこれは官築開の完成後 60 余年を経過した後に新しい田が眼前に広く開けたので「新田」と呼ぶ様になりました。

三 番 開

官築新地「仮田」の前面で一番開と二番開の中間に当たり、現在の役場から東の方面で面積は 5.3ha です。

「二番開」竣工の翌年、文化 6 年（1809）に完成しました。

有吉家は横島新地の築造を開始した時その工事事務所を今の役場の所に開設しましたが、後には有吉家横島新地管理事務所及び同家役員詰所として徐々に整備充実して行き

ました。周囲には石垣を築き塀をめぐらせました。南方向の中央に石橋と正門、北方向に裏門を設け城廓を形成していました。、

その敷地内には役員詰所、大倉庫、書類庫、役員住宅、厠などがあり、大柳や杉の樹などが繁り一大偉観を呈していたそうですが、明治 6 年(1873)に横島村戸長役場がここに移転して以後現在まで役場用地となっています。

大倉庫は明治 44 年(1911)春小天呑崎の富豪安田重之助氏(大阪の人)が買い取り「大豊開」の東北隅に移築しました。それは昭和 30 年(1955)頃まで存在していました。

また昭和 22 年(1947)以後はこの大倉庫跡地の南側に横島干拓事業所が事務所を建設し利用しています。

有吉家横島新地管理事務所

横島戸長役場（明治）

四番開（京前、岩下、外前、田ノ尻、神崎）

文政10 年(1827)有吉家の新地「一番」、「二番」、「三番」開の前方に玉名郡六郷の共同出資によって築造した新地のうちその三分の一を有吉家の権利分として同家に帰属させました。即ち一ノ切、二ノ切の 24.3ha で「四番開」と云いますが、その「四番開」は更に５つの小字に区分されています。

「京前」　京泊の前方と云う意味

「岩下」　小久保谷付近を岩と云うがその下方と云う意味

「外前」　外平の前方と云う意味

「田ノ尻」田中開、八反田開の尻の方と云う意味

「神崎」　栗ノ尾島崎神社の南方、神崎の地名は横島には幾つもあるがここは「四番神崎」と云う

川浚料開（京前川、岩下川、外前川、田ノ尻川、神崎川）

菊池川及びその他の河川修理の経費に当てるために玉名郡六郷(小田、坂下、内田、南関、

荒尾、中富）の共同出資によって郷備開として文政6年（1823）に着工し文政10年（1827）に竣工した新地です。

この新地は築造面積の約三分の一を有吉家の権利に帰属させ、残りの51.3haを六郷共有の「川浚料開」と云いますが、それは三ノ切から下の部分でこの「川浚料開」は更に五つの小字に分かれています。

即ち、「京前川」、「岩下川」、「外前川」、「田ノ尻川」、「神崎川」の5つです。

これは「四番開」の小字名にそれぞれ「川」をつけて「川浚料開」の小字である事を区別したものです。

「四番開」と「川浚料開」を合わせて通称「六十町」と呼んでいますが、これは築造当初の面積が大体60町歩程度であったためにそのように呼んだものです。

また外平付近では「四番開」の「外前」、「田ノ尻」等のことを通称「織部さん」と呼んでいますが、これは四番開が竣工した時の有吉家の当主が有吉織部であった所から「織部さん」の所領であるとの意味でそのように呼んでいるのです。

その他「役割」「茶沸し」「干出」等の呼び名がありますがこれはすべて俗称です。

参考までにその名の由来を示せば、

「役割」　新地築造の役員に対してその報酬として築造新地を割り与えた所

「茶沸し」新地築造工事現場で作業員のために湯茶等炊事作業に従事した者への報酬として下等地を割り与えた所

「干出」　低地のため満潮時には浸水し、干潮時には露出する所

文政10年（1827）「四番開」、「川浚料開」の大新地75ha余が完成しましたが、横島山南部の新地への灌漑用の送水は非常に困難でした。

時の総庄屋三村章太郎は石塘に長さ約50m程の暗渠を掘削して、「四番開」方面への灌漑用通水路を構築しました。この通水路を通称「間歩」と呼んでいますが、これは天保時代（1800年代前半）の構築と云われます。

三村章太郎はその他田地の高低等を測量し用水の調節を行い自然灌漑が出来る様に施設を設ける等して今日の潤沢な灌漑用水施設の基礎を築きました。

また「岩井樋」と云って加藤神社横の岩石を切り開いて大きな井樋を造り潅漑用水路を構築してありますが、これは大開方面の新地が築造された後に開通したものです。

五　番　開　（西十町、東十町）

弘化2年（1845）唐人川寄りに築造した新地です。「四番開」の東方向の側面、「二番開」の東前面に位置し面積は11.2haで通称「十町」と呼ばれますが、これは築造当時の面積が約十町歩弱であった所からその名があります。

最初は仮堤防で構築したため破損するので「築添小開」と共に再築しました。

六　番　開

嘉永5年(1852)に明辰川寄りに築造した新地です。
「四番開」の西方向の側面、「一番開」の前面に位置し面積は8.2haです。

築　添 小 開（大川口）

唐人川に添い官築新地「塩屋外」の東隣に接し、「二番開」の内側に当たり面積1.2haの小規模新地で、「五番開」と同時に有吉家の築造によるものです。これはその名の通り築造に添えて出来た開であるので番号を付してありません。
これは「二番開」の竣工によってその背後に自然に築造なった所で、云わば「二番開」の副産物です。
最初は石垣無しの仮堤防で構築しましたが風波のため破損し海底になるので、後に石材や歯朶等を使用して再築したものです。このことは「五番開」も同様です。
唐人川の川口に当たるので通称「大川口」と呼んでいます。

七 番 開(東竈、東沖竈、西竈、西沖竈)

嘉永6年(1853)細川忠毅(細川藩家老、内膳家・9代・後に男爵)と小田、南関、中富の三郷の共同出資によって築造した郷備新地185ha強のうち30.6haを分割して有吉家に帰属させたものです。
有吉家はこれを「七番開」と命名しましたが、通称「竈(ｶﾏﾀﾞ)」と呼んでいます。
この区域は住吉神社裏の道路をまっすぐ東に延長し唐人川に達する線から北側で「五番開」に接する地域です。
通常、新地を構築する場合は背後と側面の片方、時には両側面共既築の堤防が存在するため二辺又は一辺の堤防を構築すれば新地築造は完成しますが、ここに計画された新地は総面積185haに及ぶ広大なもので、しかも従来の自然地形を利用した築造と違いすべて人工的に干拓したものです。
潮受堤防は背後だけが既築のもので他の三辺はすべて海中遠く張り出して築造したために工事に関する背後作業を行わねばなりませんでした。その背後作業の場所として「七番開」の地域を使用しました。幾組もある現場作業班は炊飯用の竈も総てここに設置しました。この地域を「竈」と呼ぶのは後方陣地の意味であり、「竈」地帯を更に区分して「東竈」「東沖竈」「西竈」「西沖竈」の小字としたものです。

「大　開」　（二番井樋）

「大開」と「七番開」は元来異名同体の新地で、嘉永6年(1853)細川忠穀と小田、南関、中富の三郷共同出資によつて築造した新地のうち「七番開」30.6haを分割して有吉家の所領として、残りの155haを細川忠穀と小田、南関、中富、三郷の催合開としました。

大開は横島における最大の面積を有する大新地であるので「大開」と云います。「大開」の南隅に「二番井樋」と云う所がありますが、これは大開の排水扉門で、最初「一番井樋」と「二番井樋」の二つを設置していました。

しかし、「一番井樋」は井樋床が高く排水機能を失っていたので大正3年(1914)の潮害復旧工事の時これを廃止しました。

それ以後「二番井樋」だけ表現する様になったので次第にこれが地名となってしまいました。ちなみに「一番井樋」の位置は「二番井樋」より200m程上手にありました。

なお俗称として呼ばれている地名に次の様なものがあります。

「役割」　新地築造の役員に対してその報酬として築造新地を割り与えた所

「えんがい」　干拓地の端の方の部分で本方でない所、語源は「塩害」で海水の浸入する所

大開新地の築造に要した費用は総額で11、743円12銭7厘 を要しました。

築造に要した人夫の数は延べ96、830人に達しました。

上干出、中干出、下干出

「七番開」と「大開」の東端の「えんがい」地帯に属する部分で唐人川添いに元「一番井樋」のあった所までの細長い地域で、これを三つに区分してそれぞれ「上、中、下干出」と呼んでいます。「干出」とは前述の通り満潮に浸水し干潮に現れる所と云う意味です。

「大開」と云う新地はその名の通り大きな新地ですが、その東、南、西の堤防として築かれた塘は4㎞に及ぶ長大なものでした。

この大開が築造された二年前の嘉永4 年(1851)に対岸の「受免」開が完成していたので、「大開」の完成によってその間に今の唐人川が生まれたのです。

しかし唐人川の上流にはまだ放置されたままの潮遊場(遊水池)がかなり残っていました。これ等の地帯も次第に新地として築造されて行きました。

葭　場

石塘の東方向に唐人川添いの干拓地で嘉永6年(1853)小田郷の郷備開として築造され

面積は 90a です。

海中を干拓した場合に発生する雑草は不思議と同一種類のものが集団的に生えるものです。例えば葭の生える所、稗の生える所、カヤツリ草の生える所などそれぞれ同一種類の草がかなりの面積に群生しているものです。

そういう関係で、この地域には葭が群生していた場所であつた所からこの名があります。葭は葦の成長してない幼い草のことです。

八　番　開（横塘・立塘）

「川浚料開」の東半分の前面、「大開」の西隣に接して面積は 56ha です。

安政4年（1857）有吉家の築造です。「八番開」はおおむね正方形をしていますが、その北側の堤防添いの地名を「横塘」と呼び、西側の堤防添いの地名「立塘」と呼んでいます。

掻　立　・　塘　外（庄屋開）

「櫨方開」の外側に堆積した泥土を掻き立てて築いた新地であったので「掻立開」と呼び 1.8ha です。

「塘外開」も同様に安甲川堤防の外側の高洲になつた所を切り立てて築いた新地で 60a の小開で共に安政 5 年（1858）に村方によって築造された所から別名「庄屋開」とも云います。

九　番　開

「川浚料開」の西半分と「六番開」の前面、「八番開」の西隣に接し、面積は 67ha です。安政 6 年（1859）有吉家の築造です。

「九番開」の南東隅（井樋の北側）に地盤の高い区域が 1ha 程あって、ここを「調練場」と称していました。これは今で云う練兵場のことです。

有吉家においては慶応2年（1866）「十番開」の築造を完了しましたが、翌 3 年には大政奉還となり明治元年となりました。

国内が大きく変動を始め騒然となってきたので、有吉家においては万一に備え兵備を充実するため明治2年（1869）に領地横島の百姓から足軽（隊卒）として83名を新たに召しかかえました。

その足軽達に軍事調練を行う場所とした所がいわゆる「調練場」でした。

十　番　開

文久元年(1860)に「十番開」として、今の「十番開」、「明豊開」、「大豊開」、を含めた地域に広大な新地が築造されました。そして別名を「豊明村」と称し相当の入植者が新田の開墾に従事していましたが、文久3年8月の台風で堤防が決潰し容易に復旧工事が出来ず、遂にこの新地は放棄されました。

以後この新地の事を「古十番」と云います。その後慶応2年(1866)「古十番開」の規模を縮少して現在の「十番開」を完成したものです。

即ち今の「十番開」は「八番開」の前面に築造され、その面積は53ha弱です。

築造主の有吉家では連続的な新地築造のため資金難に陥りその調達のため一部の土地を売却することになりました。

有吉家代理人竹内総吉と同家御帳方沼垣彦三郎は、伊倉北方村の資産家荒木同(敬神党の乱で討死)に相談し譲渡契約を成立させました。その売却によって、辛うじて「十番開」の築造は竣工したのです。

また「十番開」と「九番開」の境の所を「船屋」と呼び漁舟(漁をする小舟)の溜まり場でした。

9　民間築造新地

明治政府となって海辺の新地築造は民間人の自由築造が認められました。

しかし明治初期には細川家が安甲川筋の新地築造を実施し、唐人川筋では上流の方に潮遊場(遊水池)等として放置されたままの地域を整理したり、横島の資産家の手によって僅かに築造された程度でした。

明治中期になっていよいよ本格的な新地築造が地元横島の資産家有志家を中心に計画実行されていきました。

上網干場・沖網干場　(網干：ｱﾎﾞｼ?)

明治6年(1873)細川家によって築造された「上網干場」は面積が90a、「沖網干場」は1.2haです。安甲川沿いで「上網干場」、「植葭開」の西方に位置しています。「沖網干場」は「一番開」の南に位置して、この両開の間には安甲川の入江がほぼ三角形に入り込んで漁舟の溜まり場になっていました。

もともと横島周辺で地引網の漁業が盛んに行われていたのはこの付近一帯の浜辺で、その頃地引網の干場になっていた所からこの名があります。この付近から栗ノ尾の「山

辺」近くまでは漁師部落だったのです。

神　崎　開

「六番開」と「九番開」との西側に添って築かれた新地で明治 8 年(1875)細川家によって築造されました。「北神崎」，「南神崎」に区分され、総面積 18.2ha です。

安甲川筋には「神崎」の名を用いた地名が八ヶ所もありますが、これはすべて栗ノ尾島崎神社の南方を意味するものです。

久々原・下久々原・川添

唐人川筋に久しく放置されていた潮遊場(遊水池)や水路の湾曲部等を整備した新地です。明治 9 年(1876)宮川栄次郎によって築造されたもので、久々原が 1.1ha、下久々原が 98a、川添が 92a、計 3ha です。

三開共 えんがい地域でカヤツリ草の群生していた場所で「葭場」開の下方から「五番開」の「東十町」に接するまでの唐人川添いの細長い新地です。

井　樋　尻

石塘加藤神社横の井樋の下方に道路と水路の間に開墾した畑地で井樋の元から京泊の天照皇大神宮の所までの帯状の地域です。その築造は「葭場」、「久々原」と同時期と思われます。またこの井樋は普通「岩井樋」と云います。

富新開（神崎尻開）（第一工区）

「神崎開」の南、「九番開」の西側に位置し俗に「神崎尻開」と云います。

（工事区域を二分して第一工区富新開、第二工区明丑開となっている）

栗崎寛太、栗原寿恵紋、宮尾尉八、坂本勘三郎、福島勉充、木村市三郎、大野好麻の発起で築造され、明治 25 年(1892)12 月竣工しました。総面積は 52ha です。

この当時の熊本県知事富岡敬明、玉名郡長新美某であったのでその名にちなんで「富新」開と名付けました。

対岸には大浜町の「明辰」開が完成し、「富新開」のうち北側の三角形の部分は「明辰開尻」と称して大浜町に属しています。

新地築造により人工的に延長して行く安甲川はこの「明辰開」を流れている所からその名を「明辰川」と呼んでいます。即ち明治の辰の年と云う意味です。

明辰川には築造新地の用水確保と海水浸入防止のため「富新開」と「烏帽子開」との間に

潮受樋門を設置しました。これを一般に 五枚戸扉門と云います。

明 丑 開（神 崎 尻 開）（第二工区）

「富新開」に次いで第二区工事として起工された新地で、「富新開」と「九番開」の南前面に位置しています。明治 26 年（1893）3 月に竣工しました。「明豊開」の築造に遅れること一ヶ月後です。総面積は 88.2ha です。

起工式を行ったのが明治 22 年(1889)であった所からこの年の干支が 己 丑にあたるので「明丑開」（明治の丑年の意）と名付けたのです。

「富新開」と同様に別名を「神崎尻開」とも云います。

（ 明辰川には「明丑開」と「末広開」との間に潮受樋門を設置しました。これを一般に六枚戸扉門と云います。　編者追記 ）

入 船 開

「網干場」の漁港から安甲川、明辰川を行き来していた漁舟は「五枚戸扉門」の設置により完全に航路を断たれ、漁港もまたその用をなさなくなりました。

そこでこの漁港も全部干陸（干して陸地化すること）して新地とする事になりました。

これが「上網干場開」と「沖網干場開」の間に今まで漁港として存在したほぼ三角形の「入船開」約 30a の新地です。

この新地の築造年代も築造主も正確には分かりませんが、築造年代は大体「富新開」、「明丑開」と同時代の明治 25 年（1892）頃と思われます。築造者は多分この漁港を使用していた漁師達ではないかと思われます。

この「入船開」は別名「焼 酎 開」とも云います。それはこの新地を築造した人達が工事の途中度々酒盛りをやっていて、いよいよ完成して清算してみると酒屋の焼酎代支払のために築造した新地分が消えてしまったので、これを風刺して「焼酎開」と云うようになったものです。

明 豊 開

十番開と大開西半分の南前面の新地で総面積約 82ha です。

原口真十郎、服部運太、沼垣格三郎、西山勘十郎、東勘三郎、宮崎儀一郎、西山亦吉、有吉平吉の発起によって築造され明治 26 年（1893）2 月竣工しました。

原口真十郎氏（天水町野辺田の人）は事業なかばに病を得て女婿の高田作太氏（伊倉町の人と交代しました。原口真十郎氏は事業の竣工を見ずして病死しました。

有吉平吉氏が名を連ねているのは文久 3 年の台風によって消滅した「古十番開」(豊明村)の築造主である所からその権利に対し名儀上の参加をしたものです。

この新地は文久元年(1861)有吉家によって築造されました。

「古十番南」別名豊明村の一部ですが、豊明村は文久 3 年(1863)に風潮害のために消滅してしまいました。

その後、現「十番開」 が築造され、次にこの「明豊開」築造されたのです。新地名は旧名を豊明村と定めていたのでそれを逆読みして「明 豊」としたものです。

明 豊 開 築 造 記 念 碑　(明豊竜神宮境内にあり)

因ニ当 開ハ元 熊 本 市 有 吉 家 古 十 番ト称シ開 墾 後 破 損 再 開 築 中 止ノ内 同 家ニ談シ許 諾ノ上 供ニ共ニ其ノ筋ノ許 可ヲ得

明治二十四年	四月十五日	許　可
同　　年	同月二十日	起　工
同　二十五年	七月　二日	潮留執行
同　二十六年	二月二十日	竣　成
同　二十九年	二月十六日	埋立地下渡許可
同　三十　年	十一月十三日	五十年免租許可

右 全ク結 了ス

明治三十三年九月　　地主建之

大　豊　開

大開東半分の南前面の新地で 43.4ha です。この新地は先に消滅した「古十番開」、別名豊明村の残余の部分です。

「大豊」の地名も豊明村にちなんだものです。明治 35 年(1902)に福島勉充、坂本勘三郎等の発起によつて築造されました。もちろん有吉平吉氏も権利に基づき発起人の座にその名を連ねているはずです。この新地が横島における明治時代最後の築造でした。

昭 栄 ・ 新 栄

横島海岸の新地築造は明治 35 年(1902)大豊開の完成を最後に久しく休止されていました。それから 45 年を経て、我が国は極度に食糧難の時代を迎えました。そこで横島の海

辺が再び世の注目を浴びる様になったのです。

昭和22年(1947)横島地先の全域から大浜町末広地先の全域にかけて総面積625haの干拓工事が運輸省港湾建設部によって着工され、昭和26年(1951)農林省に引継がれて工事を継続しました。

大浜地先から「明丑」地先までを第一工区とし、「明豊」、「大豊」地先を第二工区として昭和42年5月31日潮止式を執行し、第一工区第二工区同時に干陸されて、昭和47年(1972)に入植を開始しました。昭和49年（1974）3月入植が完了しました。

「明丑」地先を「昭栄」、「明豊」地先を「新栄」と命名しましたが、これは昭和44年(1969)5月横島町住民から部落名の募集を行い審査委員会において審査の結果決定したものです。また大浜町地先は昭和48年に玉名市において「大栄」と命名されました。共に昭和に栄え、新しく栄え、大きく栄える事を願う住民の心でありました。

１０　新地鎮護の神社

日本人の生活はいかなる山間僻地でも人家があり住民が生活を営んでいればそこには必ず神仏を祀り信仰しています。孤島横島の住民もまた日本人の生活様式から変わる事はなくむしろ陸地と隔絶した孤島の生活であるので一層心の寄り所として神仏の加護を願ったに違いありません。

転法輪紋

熊野坐神社

横島山の東端にあり、社殿は山の中腹に東向きに鎮坐し、老木が繁りまことに景勝の地に奉祀してあります。正中2年（1325）11月、時の地頭である城子大学によって勧請されました。

祭神は伊邪那美大神、事解之男神、速玉之男神の三柱です。

一般に「権現さん」と云って親しまれ孤島横島全土の護り神でした。そして現在は横島全域の総氏神に位置づけてあります。

社殿は文政6年(1823)の社寺改帳に記載されているのが横島に存在する記録では最古のものと思われますがこれに記載されている社殿は天保3年(1832)の火災のため全部焼失してしまいました。

その後間もなく以前同様の社殿を再建しましたが昭和9年(1934)に100年の歳月を経たので今の社殿に改築されました。

参考のため社殿改築に対する関係者を列記しておきます。

○　工事設計者　　熊本県土木課建築係
　　設計指導　　（県技師）　近藤　技師
　　設計主任　　（県技手）　永田　　勇
○　設計従事者　（県技手）　他若干名

○　工事施行（請負）者　　若尾工務店
　　代表者　　（福岡市）　若尾　久治
　　工事総棟梁　（後横島）　川口　幸喜
　　大工棟梁　　（三池郡）　松尾　庄蔵（高田町）
　　大　工　　他１１名
　　土木工事　　（横　島）　近藤徳次郎
　　人　夫　　他約 20 名
　　屋根左官工事　　若尾工務店直営

社殿改築については昭和 8 年(1933)に発議してその年 10 月着工し翌年 8 月竣工(しゅんこう)しました。当時の熊野神社村方世話人は次の通りです。

○　宮総代
　　同　　田代保之
　　同　　三津家貞次
　　同　　吉崎季男
　　同　　谷本佐一
　　同　　本田栄喜
　　同　　木村熊市
　　同　　福田甚作

○　村行政関係
　　村　　長　宮尾吉勝
　　助　　役　増田　清
　　収　入　役　友田豊彦
　　村会議員　　田代和民
　　同　　島村貞之

○　村会議員

同　　坂本　満
同　　小川作太
同　　桑本満留平
同　　吉崎　孝
同　　小山伝吾
同　　前田政彦
同　　田代保嗣
同　　島川直記
同　　中尾茂助
同　　島津国平
同　　木村元之
同　　米岡末雄
同　　森　安直
同　　佐々木虎喜
同　　中田又喜
同　　田中唯喜

町村議会に議長制度が生まれたのは昭和22年4月地方自治法の制定以後で、それまでは町村長が議長の職を兼務していました。

また熊野宮には宮座として神臥組と云うのがあります。この神臥組は25軒をもって構成されこの他には一軒の増減も許さない世襲制度で、一般に裃組とも呼ばれています。

神臥組は毎年御神託による抽籤で節頭が定まり、一年間の祭礼(例大祭と年末年始祭)全般にわたってその責任者となり執行者となります。

神臥組の人達

ちなみに大正元年(1912)から昭和11年(1936)までの25年間に節頭を務めた年号と神臥座組員を記せば、

大正　元年　中野　吉平
大正　２年　西本　清太
大正　３年　柴原勘四郎
大正　４年　松井　伝次

大正　５年　宮尾　作松
大正　６年　鍬崎　幸作
大正　７年　田上　三平
大正　８年　桑本久次郎
大正　９年　守永　軍次
大正１０年　増田　　清
大正１１年　島田　恒雄
大正１２年　内平三千雄
大正１３年　宮本　又吉
大正１４年　島本　申松
昭和　元年　林　増次郎
昭和　２年　島村　岩平
昭和　３年　稲田　勢蔵
昭和　４年　前田伍次郎
昭和　５年　村野　又彦
昭和　６年　小山　伝吾
昭和　７年　本田　栄喜
昭和　８年　沼垣　格彦（古宮の最後）
昭和　９年　土本　与八（新宮の最初）
昭和１０年　森山千代喜
昭和１１年　荒木　末松
（以上 25 名）

熊野神社の宮司は代々伊倉北八幡宮の宮司である阿地部氏が社掌として執行していましたが、神社改築の頃は阿地部友幸氏が幼少のために伯母婿に当る植木町杵築神社宮司坂本守雄氏が名儀上の社掌となり社掌代理を置きました。

社　　掌　　坂本　守雄
社掌代理　　月田　真澄
社　　守　　宮本　又吉
同　　平本　辰平

以上の様な陣容を以って横島村の総氏神熊野神社の改築を竣工しました。
新築の社殿は旧社殿に比べ規模は広大、壮麗を極め住民信仰の中心神域としての威儀を整えることが出来ました。

工事落札価格　　一金　壱万七千八百七拾五円也　　(17,875 円)

其の他一切の入費を含めて総予算額　　一金　弐万円也　　(20,000 円)　　でした。

昭和 9 年当時米一俵の価格が 8 円 30銭であり、大工賃金1 円 20 銭、人夫賃金 80 銭でした。現在(昭和 49 年)の貨幣価値とは比較の対象にはなりませんが、今この社殿を造営するとすれば優に 2 億円はかかるであろうと思われます。

この熊野権現を勧請した城子大学という人は菊池地方の人ではないかと考えます。

菊池地方には城氏を名乗る人がかなり存在するからです。

(※　伊勢平氏の白子党一族ではないかという説もあります。天水にはその流れをくむ者がいたようです。　編者加筆)

本田大明神

大園牟田「本田開」の中に小高い台地があって松樹雑木が生い茂り小さい社森が広い田園の中にポツンと見えています。ここは慶長 10 年 (1605) 11 月石塘築堤の時、人柱となった人の霊を祀った祠堂です。この社森の中には 3 個の建造物がありました。

① 「文成 (政？) 九戌十一月」と刻した石の祠
　石塘築堤から 220 年目(1826)に建立

② 稲荷大明神の社屋約一坪の木造と鳥居
　大正 15 年 (1926) 1 月建立

③ 人柱に関する記念碑
　昭和 10 年(1936)11 月 25 日建立

人柱の霊をここに奉祀して新しく開田した大園牟田新地の鎮護の神として尊崇し、東塘の内側を本田と云う所から「本田大明神」と呼ぶ様になったのでしょう。

そしていつの間にか稲荷神社が同居する様になって、大正 10 年(1921)頃伊倉の鶴ノ家と云う料亭から花魁衆が着飾つて本田さんに参詣道中を始めたので近郷のうわさとなり、一般の参詣者も急増して大変な賑いを呈した時代もありましたが昭和 45 年(1970)圃場整備事業のため東塘の塘口へ移転しました。

西 栗 尾 神 社　（島 崎 神 社）

横島山の西端栗ノ尾の崖上に石造の大明神を奉祀しました。これは大園方面東塘鎮護の神（本田大明神）に対して栗ノ尾方面西塘鎮護の神として祀った神でしょう。

祭神は文政6年の社森神辻堂御改帳に大明神（萱葦）と記してあるので住吉大明神と考えて間違いないでしょう。

勧請は本田大明神が慶長10年（1605）ですからこの宮もその頃と考えてよいでしょう。あるいは後年細川家によって奉祀されたものかもしれません。

横島山の西方突端にある所から「神崎明神」と云つたり「島崎神社」と呼んだりします。

明治11年（1878）全国的に神社調べが行われたのでその翌年の1月社殿新築の議が起こり神社のすぐ崖下に社殿を造営することになりました。明治12年己卯6月11日（1879）上棟式、9月下旬に社殿が落成して10月30日に遷宮式を執行しました。

それが現在の社殿であり部落の宮では八番開の綿住神社の社殿と共に有名です。

ちなみにこの神社の建築関係者を記せば

棟　梁	（大　浜）	永田　茂一郎
脇	（滑　石）	横山　喜三次
脇	（同　　）	入江　泰　作

大　工	永田　茂二郎	永平　寿一郎
	岸田　新八	三ツ家　孫市
	横山　貞平	平山　　八蔵
	栗崎　卯太郎	
木　杷	田添　武平	山瀬　新七
	平一　改十	
社殿造営総責任者	栗原　寿三郎	

横島山の東端には古くから熊野坐神社が横島の総氏神として、時の地頭城子大学によって奉祀されています。また石塘の堤上には横島新地築造の基礎をなした加藤清正公が新地氏神の祭神として祀られています。

横島西部はほとんど細川領であるために横島山西端の島崎神社は細川領の氏神であるということができます。横島南部はほとんど有吉領であるためにその中央に鎮座する八番開の綿津美神社は有吉領の氏神であるということができます。

菅　原　神　社

外平坂の「畑」と云う所に奉祀してある所から一般に「さかはつさん」と呼ばれています。祭神は大綿津美神、事代主命、菅原道真です。

勧請は正確には不明ですが細川家が肥後入国の直後横島に私築の「内家開」を築造した時その守護神として海神を石造の神祠（神を祀った祠）として奉祀したものと考えられるのでその年代は大体、寛永15年（1638）頃と思われます。

その後長い年月の間に荒れ果てて神域とも思われぬ状態となっていた時、外平の住人で喜右衛門と云う人が夢の神託を受けたので村人と相談して初めて社殿を造営しました。その年が享保元年丙申の年(1716)であり、喜右衛門は何代もその名を襲名していたようです。後年、建立された神社の碑には蟹江喜右衛門と記してあります。

さて菊池郡田島村の天満宮の宮司に伊牟田和泉守直治と云う人がありましたが、天保10年(1839) 23才の時藩主細川候に対して神道講演を命ぜられて名を成しました。

その後嘉永元年(1848) 4月玉名都小田手永の多田隈丈左衛門の招きで伊倉八幡宮において、皇道説教を実施したところ同地に七十余ケ寺の僧侶が会合して神仏の長短を議論し合いました。8昼夜にわたって議論し遂に僧侶は退出したそうです。10昼夜にわたって行われた説教の時伊牟田和泉守は32才でした。

それ以後諸大名の招きに応じて道を講じました。嘉永4年以後藩庁から度々報奨金を賜り毎年米5俵を給されました。文久元年(1861)には更に5俵を加増されました。

慶応2年(1866)有吉将監より毎年米2俵を給されることになりました。

慶応2年(1866)は外平神社の社殿を造営してからちょうど150年祭に当たります。

この時細川家は菊池田島神社宮司の伊牟田和泉守に祭事の執行を命じました。

以後外平菅原神社の社掌の職は伊牟田和泉守の手になって、実際上、田島神社の末社の形となりました。

ちなみに田島神社の祭神は菅原道真公、大国主命、少彦名命の三柱で大国主命、少彦名命の二柱は海神です。

外平神社の祭神は大綿津美神が最初からの祭神であったのでそれに菅原道真公と事代主命（大国主命の子）を併せて勧請したので田島神社同様に海神二柱と天神さんを祭神とする様になったと考えられます。いわゆる田島天満宮の末社（子宮）としての形を整えた訳です。十番開はこの年に築造が完成したので築造主の有吉将監立愛は竜神勧請には細川家同様 伊牟田和泉守にその神事を託しました。

菅原神社は横島に只一社鎮座する異色の神社です。社殿は明治12年(1879)に新しく造

営しました。(神官の伊牟田直治は明治 19 年(1886) 8 月神宮教玉名分教会長になったが、明治 25 年(1892) 4 月病死した。)

天照皇大神宮

細川家官築新地の内、京泊方面新地鎮護の神として奉祀したものと思われます。熊野坐神社の前から200m 程東で道路の分岐点に奉祀してあります。

祭神は天照皇大神で、勧請は延享2 年(1745)です。「櫨場御新地守護神として勧請 仕 り侯」とあります。

竜　神　(移転ずみ)

一番開、三番開、四番開の接する地点(今の漁協事務所の所)に奉祀してありましたが明治 11 年神社調の時他へ移転合祀しました。この竜神は有吉家の一番、二番、三番、四番、六番開の鎮護神として奉祀したものと思われます。

金　刀　比　羅　神　社 (こんぴらさん)

「七番開」の唐人川堤塘のそばにあります。祭神は大物主 命、崇徳天皇の二柱です。勧請は嘉永 7 年(1854)3 月 10 日で、有吉家が「五番開」と「七番開」鎮護の神として勧請したものと思われます。

今の社殿は昭和 34 年(1959)の建築です。

大　開　住　吉　神　社

大開入口の要所西割一の切にあります。

嘉永 6 年(1853)に大開新地が完成したその新地鎮護の神としました。祭神は大綿津美神です。

勧請は嘉永 7 年(安政元年)(1854)3 月 21 日細川藩家老細川忠穀によって勧請されました。

神社勧請に当たって細川忠穀の筆によって「住吉大明神」の 5 文字が大書されました。

石工は隣村赤仁田村の吉蔵と云う者が選ばれました。高さ 9 尺の自然石の巨碑に石工「赤仁田吉蔵」は身を清めノミをふるって一心不乱に「住吉大明神」の 5 文字を刻みました。

彫刻の終わった神像石を建立し勧請入魂式の時細川忠穀は「見事な出来栄えだ予の書いた原書以上の出来である。」と云って賞讃したそうです。

今建っている神像碑石の「住吉大明神」は家老細川忠穀の字であるに間違いないと伝えられています。その彫刻は赤仁田吉蔵の手によるものですが、御神体であるためその名は刻んでありません。赤仁田吉蔵はその後大開新地に入植しました。明治 3 年 9 月赤仁田吉蔵は「福田吉蔵」と名乗りました。これが今の福田学氏の曾祖父に当たります。

明治 13 年(1880)5 月に拝殿が造営され、昭和 12 年(1937) 3 月に改築してあります。

八　番　竜　神　官

最初は八番開北塘添の中央にあり萱ぶきの社殿で海神を奉祀しました。

「八番開」は安政4 年(1857) 8 月の築造です。祭神は大綿津美神です。勧請は安政 5 年(1858) 3 月新地鎮護の神として有吉頼母によって行われました。

明治 4 年(1871) 秋、有吉家役員詰所(元の役場)は横島村戸長役場に使用する事になったので沼垣彦三郎は八番竜神宮の東隣に住宅を新築移住して酒屋を開業しその名を彦二と改めもっぱら有吉家の諸業務をつかさどりました。

明治 11 年(1878)神社調べの時、八番竜神宮を有吉領の氏神とするため前方に移転新築する事になり明治 13 年(1880) 3 月 16 日竣工しました。

これが今の社殿で栗ノ尾島崎神社に遅れること 6ヶ月後の造営です。社殿は壮麗を極め一大景観をなし今もその荘重さは失われず、大風で大屋根は激しく揺れても建物がビクともしない構造は不思議と云われています。

部落宮では八番綿住宮の社殿は栗ノ尾島崎神社の社殿と共に有名です。ちなみにこの神社建築の関係者を記せば、

棟梁	(横島村)	板井　嘉一
脇	(横島村)	古閑　淳作
同	(釜尾村)	田尻　惣平
大工	(西安寺村)	木下　久助
同	(部田見村)	古田　安平

同　（　〃　）　古田　喜平
同　（　〃　）　上尾　幸作
同　（尾田村）　松本　次郎作
同　（五丁山室村）宮本　尉作
同　（横島村）　大塘　清作
同　（白浜村）　南　喜次郎
同　（小天村）　宮川　喜家次

御社殿造営村方世話人

人民総代	沼垣　彦二	二ノ丸役方
消防（放）	友成　善七	
同	大谷　喜三郎	
宮総代	今村　直八	
同	村上　甚七	
同	広田　勘三郎	
同	緒方　伝作	
同	野口　源蔵	

九　番　竜　神　宮

「九番開」は安政 6 年(1859)の築造です。その新地鎮護の神として九番開中央東割一ノ切に海神を奉祀しました。祭神は大綿津美神、勧請は安政 7 年(萬延元年)(1860) 8 月新地築造主 有吉将監立愛によって勧請されました。

最初萱ぶきによる神社でしたが明治 11 年(1878)神社調べの時、社殿を造営することになり、服部常次郎、木村市三郎等の肝煎りによって明治 13 年(1880)10 月 20 日今の社殿を造営しました。

拝殿の天井に百人一首の歌絵を画いてあるのが見事でしたが、昭和 35 年(1960) 頃破損が激しくなつたので、歌絵の上に化粧天井板を張ってしまいました。

「九番開」では昭和 49 年(1974)に百年季大祭を実施しました。これは明治 7 年(1874)に「九番開」で死者 9 名を出した大潮害を蒙ったことがあり、その復旧を記念して大祭を行つた時から数えた年次と思われます。

十　番　竜　神　宮

「十番開」は慶応２年(1866)に築造されました。その新地鎮護の神として西割一ノ切に海神を奉祀しました。祭神は大綿津美神です。勧請は慶応3丁卯年(1867) ４月７日新地築造主有吉将監立愛によってなされました。

竜神勧請の神事は慶応２年(1866)より有吉家と関係の生じた合志郡竹迫手永田島村天満宮神司の伊牟田和泉多治比真人直治によって行われました。

初めは萱ぶきの神祠でしたが明治24年(1891) ８月社殿改築瓦ぶきとし、更に昭和43年(1968)老朽のため現在の神殿に改築しました。

十　番　英　彦　神　社

十番開北塘添の東端から100m程の所に大きな銀杏の木があってその下に石祠で奉祀してあります。

祭神はニニギの命・アメノオシホミの命です。

勧請は明治元年(1868) 頃伊倉北方村の資産家荒木同氏です。これは十番開築造にあたり資金難に陥った有吉家がその完成のために売却した築造新地を買受けた荒木同氏が自分の所有に属する新地の守護神として勧請奉祀したものです。

神　崎　竜　神　宮

神崎は一部分の土地が高洲になっていたので富裕家の人たちが藩庁の許可を得て資金を出し合い開墾を始めました。

そしてこの神崎高洲にも海神を祀りました。祭神は大綿津美神です。勧請は明治元年(1868)高洲開墾を始めた人たちの手によって行われました。

「神崎」開は細川家によって明治８年(1875)に築造されましたが、海神を既に勧請してあるのでそのまま神崎開鎮護の神としました。

神社は石造りでした。明治 11 年(1878)に神社調が行われた後、「路傍山野等に散在せる神祠仏堂は寄り寄り社寺に合併移転せよ」との御布令があったので一旦九番開の綿津美神社に合併しました。

しかし、「神崎開」と「九番開」とは元々別の地区であり 祭典、修繕等に関し大変不便であったため 元の通り神崎高洲に移転勧請しました。

萱ぶきの社殿を造営して 存置願を明治 13 年 10 月 3 日付けで木村市三郎、松村理平、川本又七と神官 安詮院維感男、戸長 服部運太の連名で熊本県令 富岡敬明宛に提出しました。

この許可によって神崎の竜神宮は再建され、昭和 42 年(1967)今の社殿に改築されました。

加 藤 神 社

天正 17 年(1589)加藤清正公が広大な小田牟田新地を造成するため鍬入れしてから 280 年の歳月を経て、往時の孤島横島は広大な美田に囲まれた陸上の丘陵と化しています。そして石塘の下流唐人川も年々整備されてその川沿も順次開田されています。

清正公の御恩と神徳を尊びあがめるために石塘築堤上に加藤神社を奉祀しました。祭神は加藤清正公、勧請は明治 3 年(1870) 8 月です。初め加藤清正の遺像を石の祠に納め安置していましたが当神社の記録によると、明治 26 年(1893) 頃社殿を建築したと記してあります。

三津家伝喜　　吉崎 村太

2 人は初代宮総代として京泊、大開の住民と共に神社勧請の当初から神域の整備に努力されました。明治 28 年(1895)には石の鳥居をはじめ諸建造物建立までに神域は充実しました。

大正 7 年(1918)記念碑、玉垣等の造営がなされました。海に浮かんだ弧島横島を広大な美田の横島とするための基礎を築かれた加藤清正公をそのゆかりの地である石塘に奉祀された事は極めて意義深い事であると思います。我々横島の住民は清正公の恩恵を忘れる事なく感謝し神徳を永遠に尊崇しなければならないと思います。加藤神社は横島新地の氏神です。

富　新　竜　神　宮

富新開は明治25年(1892) 12月竣工しました。「富新開」は「明丑開」と共に「神崎尻開」と云って一工区、二工区の関係にあり築造主も同一の人々です。富新開鎮護の神として建てられ祭神は大綿津美神です。

明治28年(1895)栗崎寛大、栗原寿恵紋、宮尾尉八、坂本勘三郎、福島勉充、木村市三郎、大野芳麻によって勧請されました。最初は一ノ切東寄りの小島只次氏宅付近に石祠で奉祀されましたが明治40年春(1907)一ノ切西寄りの現在地に移転しました。その後昭和32年(1957)石祠を新しく構築して公民館兼用の拝殿を建立しました。

「富新開」は築造当時から暴風の洗礼を受け、竣工後も度々その被害を蒙り堤防が決壊して海水が浸入する等、修復の連続で地主も小作人もその負担の重加するのが胡椒のように辛辣なので人々は「富新開」のことを胡椒新地と云いました。

明　丑　竜　神　宮

「神崎尻開」の二工区として築造した「明丑開」は明治26年(1893) 3月竣工しました。「明豊開」の完成に遅れること一ケ月です。

人力の限りを尽しても自然の猛威には抗し得ないので神力にすがる心は益々強くなりました。

どの新地も築造されたら必ず守護神を祀った様に「明丑開」もまた同様に新地鎮護の神を奉祀しました。祭神は大綿津美神です。

「富新開」と同じく築造主の人達によって明治29年(1896)に勧請されました。

新地築造が完成して間もない明治28年(1895)7月20日の暴風で「明丑開」の堤防が決壊しました。今ある西川ホゲはこの時できました。ところが15日程経った8月4日夜の暴風で西側堤防がまた決壊しました。

その翌年の春、西川ホゲの潮留口に竜神さんを勧請して石祠で奉祀しました。

大正3年(1914)8月25日の高潮で各所に決壊破損を生じ各所から海水浸入しその深さは7mを超えました。しかし不思議に竜神宮の鎮座している付近の堤防は無事でした。その後も度々風害、潮害が横島を襲い昭和2年9月13日の風津波では横島全面積の半分以上は海原となり「明丑」の水深は7m余に及びましたが、不思議に神域は無事でした。

「明丑」開の竣工後わずか20余年の間に堤防が誠によく切れるので土地の人はこの新地のことを剣新地と云いました。しかしこうした惨状の中にも神徳を慕い神恩に感謝する明丑開の住民は昭和11年(1936)4月社殿を造営しました。この時の区長は上野一二氏でした。

明　豊　竜　神　宮

「古十番開」の中、豊明村を逆読した「明豊開」の築造が完成したのは「明丑開」より一ケ月早く明治26年(1893)2月20日でした。
「明豊開」守護神の鎮座の位置は中央入口の北塘添要所の地点に定められました。
祭神は大綿津美神です。

勧請は築造主高田作太、服部運太、沼垣格三郎、西山勘十郎、東勘三郎、西山書又吉、宮崎儀一郎、有吉平吉によって明治29年2月(1896)石祠で奉祀しました。(初めは低い石垣の上に祠を祀ったが後に高石垣にした)

明治38年(1905)7月17日、大正3年(1914)8月23日、大正8年(1919)8月16日、昭和2年(1927)9月13日の4回、暴風により堤防が決壊しその被害は毎回「明豊開」が第一位を示しました。

堤防の決壊する時は守護神もまたその全身を海中深く沈めて波浪に翻弄されながら地区の住民を加護し給わりました。しかし昭和2年(1927)9月13日の暴風の時堤防が決壊した「明豊開」は7mを越える深さの海と化しました。

その時逃げ遅れて流れるわが家の上に乗ったまま荒れ狂う風波の中を数時間もかかって飽託郡河内村に漂着した大林卯一郎さん(当時48才)は逆巻く風波と雨の中に幾度か竜神の姿を見てまさに九死に一生を得られました。まったく神仏の加護のおかげであると述懐しておられました。

「明豊開」に鎮座する石祠の綿津美神はこうして何回も海中に沈まれました。

大 豊 住 吉 大 明 神

「大豊開」も元「古十番」に属し豊明村の一部です。

新地の築造は「明豊」開よりはるかに遅れて明治35年(1902)に完成しました。

「大豊開」も「明豊開」と同様に波瀾万丈の新地で、築造完成の3年後には隣の「明豊開」が堤防決壊しそ

の余波をモロに被りました。暴風の襲来はその数を知らないほどでした。

大正3年(1914)8月の高潮には「明豊開」と共に「明丑開」の決壊より2日早く23日に堤防が決壊し被害最大の地でした。

その被害復旧もまだ終わらない大正6年(1917)4月20日にまた堤防が決壊しました。

大正8年(1919)8月16日には「明豊開」と共に堤防が決壊しました。

昭和2年(1927)9月13日には「明豊開」と共に8mに及ぶ高潮が押し寄せ復旧の見込みも立たない有様でした。

こういう状態であったので「大豊開」には久しく神社の勧請はできませんでした。

その後潮害復旧工事に全力をあげました。耕地整理組合によって耕地の整備、灌漑、排水、道路、橋梁等完全に復旧し堤防は堅固となりようやく「大豊開」も完全に整備が完了したので、人心を安んじるため新地鎮護の神を奉祀する段階になったのです。

祭神は住吉大明神（大綿津美神）です。

勧請は昭和4年(1933)8月大豊開耕地整理組合によって奉祀されました。

当時の耕地整理組合長は坂本辰雄(坂本勘三郎の二男)でした。

「大豊開」は福島勉充、坂本勘三郎によって築造されましたが福島勉充は完成後間もなく他界し、坂本勘三郎もその生存中に神社勧請までに至らなかったのを二男辰雄によって勧請が実現したことについて故人もさぞかし満足のことと思われます。

横　島　干　拓　守　護　神

昭和49年(1974)3月をもって入植も完了しました。遠からずして入植者の生命財産を守護し干拓新地を鎮護する神社が勧請される事でしょう。

１１　横島を襲つた潮害

横島で最も恐ろしいものは潮害です。横島を襲った主な潮害について記します。

「寛政4年(1792)4月1日の大津波」雲仙岳眉山の一部が有明海に陥落したために巨大な波を起こし津波となって対岸の肥後を襲ったのです。

今も県下沿岸各地では寛政の大津波と云って古老はその惨害を語り伝えています。

普賢岳火砕流(平成)と眉山崩落(寛政)跡

扇崎千人塚（岱明）

当時「島原大変肥後難題」と云う言葉が生まれたそうですが、玉名郡の流死者が 2221 人、肥後国の合計は 5000 人に及び負傷者も 1000 人近くあったと云います。

横島にも相当の流死者、負傷者があったと考えられますが残念ながら何も記録がありません。この時の津波について横島に伝わる云い伝えは「京泊高岸」に露出する石の位置まで高潮が押し寄せたと云うことです。この石は現在道路上 5m 位の所に在ります。

また外平阿弥陀堂の横に立っている石もこの時の津波襲来の標識であると云われていますが現在では少し南へ移動しています。

当時横島の海辺は細川藩の官築新地までで、京泊では山根から200m位、外平では450m位先まで新地が出来ていました。外平方面は地面が高く遠浅が大きいので新地も割合遠くまで進出していました。潮の高さは天草郡で平潮(平常の潮位)より 25 尺(約 7.5m)ないし 15 尺(約 4.5m)程高くなったと記録されているので横島海岸でも大体同じ位の高潮が来たと考えられます。

津波石跡

○ 「天保14 年(1843)の大風」

正確な月日は判明しませんが夏の大風で横島、部田見の新地堤防が決潰して相当の被害を蒙りました。当時横島新地は「四番開」、「川浚料開」(八番開・九番開の裏道路)まで築造されていました。

○ 「文久 3 年(1863)の暴風」

7 月の暴風で大開、八番開、九番開の堤防が決潰して多大の被害を蒙りました。

豊明村(古十番開)はこの時消滅しました。

○ 「明治 7 年(1874)の暴風」

8 月 20 日夜、未曾有の大暴風雨が襲来し、家屋は殆んど倒壊、十番開、神崎開、京泊の小開等が決潰、九番開で死者が 9 名出ました。

○ 「明治 24 年(1891)の暴風」

9 月 14 日に暴風があり、十番開、九番開、八番開、大開、七番開、川浚料開等は被害甚大のため徳米完納の見込みが立ちませんでした。

○　「明治 28 年(1895)の暴風」

7 月 20 日猛烈な東風で明丑開が決潰しました。また 8 月 4 日夜にも暴風で明丑開西側の堤防が決潰しました。

○　「明治 38 年(1905)の暴風」

7 月 17 日の暴風雨で明豊開が決潰しました。

○　「大正 3 年(1914)の高潮」

8 月 23 日の高潮で大豊開、明豊開が決潰しました。8 月 25 日の大暴風高潮で大開、十番開、八番開、明丑開、富新開、神崎開、九番開、六番開、網干場開、掻立開が決潰し甚大な被害を生じました。

死者 16 名(明丑開 14 名、富新開 1 名、大開 1 名)が出ました。この時の高潮は平潮より 1.5m 程高かったそうです。

大正３年の被害状況

○　「大正 6 年(1917)の暴風」

4 月 20 日大豊開の潮止堤防及び他の石垣が全潰しました。

○　「大正 8 年(1919)の暴風」

8 月 16 日の暴風で午前 11 時に大豊開が決潰し、午後 1 時に明豊開が決潰しました。

○　「昭和 2 年(1927)の暴風」

9 月 13 日の暴風で午前 10 時 30 分に大豊開、明豊開、明丑開が決潰しました。

それに次いで十番開の入江が決潰し、引き続き大開西、大開東、唐人川堤防、久々原堤防が決潰しました。　この時の潮害では死者 2 名(明豊開 1 名、八番開 1 名)でした。

この時の高潮は怒涛の猛烈さ潮位の高さ共に大正 3 年(1914)の場合より遙かに大きく、高潮は堤防の上 60 cm、潮位は 7～8m あったにもかかわらず大正 3 年に比べて死者の少なかったのは潮害を何度も体験した結果だろうと思われます。

１２　原本　「はしがき」

郷土を愛しましょう。
私たちの住む横島町ほどよい所は少ないと思います。

果てしなく広い水田にはおいしいお米が沢山できて、裏作にはいろいろな野菜や麦が見事に生育し、トマトや南瓜の生産は日本一となりました。

広大な水田の真中には小高い山もあります。山の南の方角には遠浅の海が広がっています。有明海は快い潮風を運び、一旦干潮となれば魚介の豊庫となります。

北方には小岱山があり、南には金峰山がそびえ、東方三ノ岳には山全体にあふれるばかりのミカンが夏は深緑、秋は夕日に映えて赤く四季の色が実にあざやかです。

西方はるか海上には雲仙の峯が美しい姿でそびえ、玉名平野を流れる菊池川の清流は広大な美田をうるおし、明辰・甲申・唐人の三川は田が冠水しないよう排水の任を担っております。このような麗しい郷土がどこにあるでしょうか、私達の祖先はこんなに立派な郷土を私達に残してくれました。今度は私達がそれを益々立派な良い郷土に造り上げて子孫に残してやらなければならないと思います。

この 400 年間に横島は大きく変化してきました。これからもさらに変化していくことでしょう。私達はその過去を知り現在を造り将来に残さなければならないと考えます。

昭和 27 年の正月に私の近所にお住まいの中野元喜氏（故人）から「君の家には資料がたくさんあるはずだから八番開の今日に至るまでの百年間の歴史を書いて欲しい、八番開に住む若い者の将来のために書き残しておく必要がある」と言われました。

しかし、私にはそんな素養は無く、資料もこの頃はすでに私の家に保存してあった相当量の書類はほとんど見当りませんでした。

私の家では大事業のあと、父が 2 才の時に祖父が病死したので家計は急速に傾いて行きました。私が 11 才の頃は破産に等しいまでの赤貧になっておりましたが、古文書類はまだ全部保存してありました。

昭和 11 年、私は 16 才で海軍に入籍しました。大東亜戦争の末期には二人の弟も出征し、父も 50 才になって徴用されました。家は女と子供ばかりになって住まいは荒れ家財道具は破損し、物資は何もない状態になりました。古文書類はその時ほとんど散逸消耗してしまったのでした。

私はその器ではありませんが、自分自身の勉強にもなるからと思い直して努力してみることにしました。

我が家に辛うじて残っている書類を検討したり、沢山の古老にも会いました。疑問が生じるとどこにでも足を運んで確かめ、沢山の人の協力を得ました。しかし仕事の合間にする大変地味な仕事で、一つの問題を解明するのに何ケ月もかかり、その裏付けにはずい分苦労しました。

そのようにして二十余年を経過しました。人の奨めもあって横島全域についてまとめる事にしましたが、実に薄氷を踏む思いで綴りました。

重工業の進出と農業構造改善で横島の地理的状態が急速に変わって昔の面影が次第に消えて行きますので、この度は「横島の地名」のことを主に集録する事にしました。

大変不完全で恐縮ですが、変わりゆく横島の過去の姿を記述し謹んで先人の大偉業に合掌しつつ横島町民の皆様に贈呈することに致しました。

横島の他の部門については後日更に集録する予定でおります。

昭和 49 年 6 月 26 日
沼　垣　　功

参　考　文　献

肥後国誌　玉名郡誌　玉名郡村誌　郷土読本　郷土の歴史　横島郷土志
横島町略史　干拓　干拓総覧　国土開発　熊本の歴史　加藤清正伝
肥後人物史　肥後人名辞書　熊本歴史散歩　熊本県潮害誌Ｔ３　熊本県潮害誌Ｓ２
百科辞典　日本史辞典　文化大年表　大日本歴史集成上　大日本歴史集成下
資料日本史　全国神社物語　神様戸籍調　仏様身元調　横島運営農会
機関誌　展望台　熊野宮祭事記　加藤社諸記録　加藤清正と高瀬川の文化
文政六年横島村社森神辻堂御会帳　泗水町誌　M11 第七大区第二小区神社調
田島村誌　有吉家一領一匹足軽名附簿　その他古文書多数

横島に伝わる地名と由来
昭和四十九年十二月　十　日　印刷
昭和四十九年十二月二十五日　発行
著者　熊本県玉名郡横島町
沼　垣　　功
印刷所　熊本市下南部町五二五
同　　文　　社

平成２４年３月２０日　印刷
横島校区まちづくり委員会
史跡ウォーキング部会　編集委員
沼　垣　　堅　基
本　山　　重　信
田　上　　克　昭
光　田　　亮　子
宮　尾　　裕　子
立　野　　美代子
印刷所　熊本県玉名市寺田 123-1
株式会社有明印刷

1

2

3

4

5

6

7

8

横島校区まちづくり委員会製作紙芝居 **「生だごまつり」 より**